

昭和四十一年一月九日 第 三 七 号 郵便物認可
昭和四十三年九月二十五日 印刷
昭和四十三年十月一日発行 (毎月一日発行)
(第三十七号)

川柳塔



No. 37

路郎賞・川柳塔賞発表

十月号

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬菜 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

43年度 路郎賞・川柳塔賞発表

(同人総会は午後3時から、句会は6時から)

日時 十月六日(日)

会場 天性寺(てんしやうじ)

市電・市バス上本町四丁目停前

(両側がガソリンスタンド)

(電話761・4868番)

柳話 中島 生々庵

受賞作家表彰

兼題

「前歴」 山川阿茶選

「片道」 後藤梅志選

「天高し」 西尾 梨選

「プライド」 北川春巢選

三題(題と逆者は当日発表)(各題三句)

席題

会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鯉谷仲之町二〇

川柳塔社

(電話大阪271・3985)

11月の兼題

「タレント」 「古本」

「浮気」 「違反」

明日を働く老医としての身だしなみ
老医そろそろ人間が嫌いと言せられ
気負うても老医の歯車かみ合わせ
老医の自嘲水族館の鯛に見る
今に見ろという話からは遠く居る

中島生々庵

今月のことば

石の上にも三年という三年目がやって来た。
川柳塔にとって、この三年間の石の座は決して
なま易しいものではなかった。くわしくは
申し述べぬが、人こそ知らねかくまもなし
の三年であった。一寸した鉄砲水でも出たら
飛騨川のパスと同じ運命を当然迎ったたであろ
う。激しい鉄砲水ではなくとも、たえず数百
米の山上から湧いては流れて来る地下水にお
びやかされ通しであった。幸い防災工事を上
手に施してくれたのと、これという天変地異
が起らなかったお蔭で今日という日を迎え得

たのである。何だか遠まわしにたとえ話のよ
うな書き振りであるが、現実には暖かく迎え
て下さって、育てて頂いた各柳社のおいつく
しみると、社の内外柳人のご厚誼の賜ものに外
ならない事を申し上げたいのである。その感慨、
お礼ごころ、反省等が胸一ぱいにつまって来
る。西の空にいつも浮かんでいる雲の峰が、
うっすら紅そえて歓びのあかね雲に彩る日を
どの位念願している事か。もう一奮発だ。皆
様の温かい鞭と、根強い導きとを祈念し期待
してやまない次第である。

川柳塔十月号

川柳塔十月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

句集・句碑……………服部十九平…(2)

豊臣秀吉……………富士野鞍馬…(30)

川傍柳初篇研究……………(六十四)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

路郎賞発表……………北川春巢・菊沢小松園…(22)

川柳塔賞発表……………若本多久志・市場没食子
正本水客・戸田古方…(25)

橘高薫風・川村好郎

私論・柳論

句集・句碑

十月のこえを聞くと高天肥馬、
灯火親しむとくる。

秋空のもと句碑を訪ね、秋の夜
長に句集を繙く亦佳ならずやである。

ところで私は句集、句碑について
私なりの考えがある。私も句集
を出そうかと十年前に色氣を起し
自選句五百を小冊子にし先輩諸賢
に送って、いい句と悪い句とにチ
エックして貰った。それを集計し
てみると全部の人が可とする句は
一句もなく、そこで私は句集出版
を断念し現在もその考えでいる。

句碑については自分の句碑など
考えたこともないが川柳墓を建て
ようと思っている、一昨年西日本
川柳大会の前夜祭が終った後私は
私の生家へ一年振りに帰って翌朝
祖先のお墓詣りをした、その時妹
曰く「親兄弟も次々とお墓になり
今度は兄さんの番ですが、生きて
いるうちにお墓を建てれば長生き
出来るそうですヨ」と、私はこれ
にヒントを得て、俺の墓は俺で建

死の川の追憶……………	東野大八……………	(42)
秀句鑑賞……………	後藤梅志……………	(44)
見えたら……………	高鷺亜鈍……………	(19)
添削をしてまでも……………	山添眉水……………	(41)
近作柳樽……………	西尾棨選……………	(32)
川柳用語いろは集……………	鈴木村諷子……………	(58)
第二編集室……………	不二田一三夫……………	(64)
初步教室……………	菊沢小松園……………	(46)
大萬川柳「橋」……………	清水白柳選……………	(50)
★柳界展望……………	……………	(52)
★本社九月句会……………	……………	(54)
★各地柳壇……………	……………	(59)
「プラン」……………	舟木与根一選……………	(48)
一路集「役付き」……………	小畑自有浪選……………	(48)
「子連れ」……………	中川晃男選……………	(49)
★編集後記……………	……………	(64)
……………	(白柳・一三夫)……………	(64)

であろう。だが普通の墓でなしに川柳墓にしよう、併し墓に彫るような自信句は私にはまだない、よしこれから私は墓に刻んで後世に残すに足る一句を得ることを目標に作句精進しようとした。自分でひそかに決心しただけでは頼りないので大会の披露前に生々庵主幹等遠来の諸先輩も居られるところでのことを宣言したのである。よく後世に残るような句を一句ぐらいは作らねばと言われるが、後世に残すと言ってもどんな風にして残すか、人口に膾炙して教科書に載るような名句はなかなかのことだが句碑にでもすれば残るかも知れぬ、併しその句碑の管理が長続きがするかどうか、墓に刻んでおけば自分の子孫だけは長く見てくれるだろう、私はこう思っ川柳墓を思いついたのである。

私は弓削川柳社の置かれている泰西寺の壇家であるから川柳墓を建てて長生きしてもやがては長谷川光寛和尚(紋土編集長紫光)が川柳墓に葬って供養し法事の度毎に私の子孫に川柳の語をして下さるでしょう。(服部十九平)



中島生々庵選

東大阪市 久米奈良子

青森市 工藤甲吉

ためらえば愛の真偽を疑われ

おもわくのそれぞれ充てり花と蝶

うけとめて心の襖にかくことば

波がしら迫りて心問うごとく

祖母七回忌によせて

祖母恋えば麦蘖細工まなかいに

香川県 三井酔夢

高校生の子に（四句）

家業継ぐつがぬでもめている残暑

医学部をめざすにしてはのんき過ぎ

浪人もたのしからずやとは甘し

私立には入れとうないと口走り

留守番に月がきれいな夏祭り

あつという間に北の海秋の色

緑蔭に目下無職は昼寝する

山椒の実でなくなつたまま日本

国の米は余り我が家の米は空

金が名がなんだと火葬場の煙

岸和田市 内藤きさ子

古縄を巻いて捨犬らしくなり

風鈴に留守をたのんだ風鈴屋

おしどりの距離を乱さずまたたかず

残照にかまわず街は夜の化粧

庖丁の背なへ鰻は目をつむり

迎えの人々とすぐに輪ができる

大阪市 正本水客

陽の真下に家々は息をひそめて
昨日も今日も海は遠くから寄せてきて

気休めの言葉へも涙流しとく

墓詣りの三三五と追いこさず

大阪市 橘 高 薫 風

彼岸会の無音無明は亀にあり

楽しけど夢に音なし恋といて

石仏を三たびめぐれば縁生る^{たしあ}

眼鏡屋は鯛雲ほど並べたり

秋風に乳房かくされゆく惜しや

室戸市 奴田原紅雨

飲みかけたところへ何してんのと電話

倒産すれば出来すぎていたと言う

酔っている訳はほとけが知っている

秋の夜を独りさだめと思う酒

拗ねてみることも生くべく夜の蝶

大阪市 石倉旅風

返信が来んでも腹の立たぬ仲

豊作の西瓜はポイと扱われ

馴れすぎてベテランらしくなり下り

几帳面そうな顔振り物を訊き

順調な気候の夏は暑いもの

高槻市 若柳潮花

家出した猫が汚れて帰って来

噂 今日には自分のことも聞く

皮肉にも半間を踏ます試験舞

釣って来た鮎泳がせる金魚鉢

稽古場の汗へ届かぬ扇風機

豊中市 戸田古方

引くという手のあることを忘れてた

エスカレーターと云う名で大地うごかせる

コンピューターあなたにまかせきれぬこと

立つことが実はこんなにおおごとだ

馬鹿力若ければこそ馬鹿力

大阪市 本多柳志

親の目に家を継ぐ子の廻り路

老いらくのデートへ邪魔な歩道橋

コーヒ飲み残し意見折り合わず

マッチピラ風天ヒッピー戎橋

汚職白書厚い日本紳士録

大阪市 室谷鉄舟

長い物に巻かれて郵便素直なり

新しい日焼けの顔で月曜日

かぶと虫どうしたどうしたタイル張り

湯上りのような顔して電車降り
こちらまで一緒に暑い犬の舌

名古屋市 吉田 水車

人生の誤算カバン重たし
タイムレコーダーああ人生も蟻の如
謙遜なんか通じないよ君

政治米価に票米価国民はとかれ
食堂でペテンのようなものを喰い

下関市 桜川 不水

座が減って惚れた妓が酌ぎに来る
妻楊枝嚙んで酒が足りなさそう

さかずきをほめて戴くおちよぽ口
冷やしむぎしづく返りにチトおどけ

更年期ですなと脈も診てくれず

出雲市 原 独仙

いけすかぬ奴だが利用価値があり
パパママと呼ばせこの餓鬼どもという

失職が笑いの止まらぬ夢をみし
準備体操したが泳げぬ娘が一人
上役のミスははっはっはで済み

高槻市 傍島 静馬

兎に角も予らは自分で建てて住み
目に見えて退職金の減るあがき

甲斐性ない父と思うが憎めない
養子でもないのにこまめによく動き
前屈み孫に直されうれしがり

奈良県 草深 醉升

石切神社に参詣して

やれやれとお百度踏んでかき水
鹿のんのと失業の眼にうらやまし
やりくりがついたか又も法螺を吹き
主人が主人がとやたらに二号さん
ストなどはやる顔でなし新入社

泉佐野市 大工 睦夫

母の手は子の跳び縄に揺れる夏
笑いそうな呼吸見透かす金語楼
けちんぼと思う女房で頼母しい
囑託の気候な作業で信じられ
蒸せるだけむして夕立山へ去り

大阪市 不二田 一三夫

英霊の子はもう神の子ではない
週刊誌の離婚は夕立ちに似て爽やか

寄 席(三句)

二つ目になって両親やと折れ
笑うから話を落とすのでこまり
玄人筋にはめられ人気出ずじまい

岡山県 直原七面山

やせたでしょうと嫁いで三月

全快の先ず手初めに庭掃除

世界は二人のためにあるとは知らず老い

遅しく生きぬく寡婦に子が五人

鳥取県 清水一保

あの頃は良かった家にも赤トンボ

懸命に生きる努力の金魚鉢

夕涼み月の世界へふと通い

夏ヤセに自信があつて気にならず

宝塚市 中村ゆきを

縄のれん首出したとこ見つけれ

夏向きの体と阿呆のよう云われ

出身校聞きもせんのにふれたがり

スタミナか知らぬが妙なものを喰い

倉敷市 野田素身郎

誉め方もいろいろ祝辞まだ続き

割勘できてまで愚痴を聞かされる

無理してとつた休暇へ妻や子がせがみ

老眼鏡始めは家でだけ使い

鳥取市 藤本礎山

何か当てある日の女パーマかけ

神木が凶のみくじでしばらくれる

搜索の山へ山彦こだまする

動いてる亡母の時計にはげまされ

兵庫県 大江秋月

風鈴の音色も京にきて変り

居睡りは婦人に多い昼の汽車

ダイヤルもまどろし悲惨な事故のあと

行先は犬にまかせる散歩道

大阪府 大坂形水

かくし芸男性軍が顔負けす

裏芸の方は負けない浴衣会

銀行も警戒をするゴルフ焼け

昼飯を断り切れず乗り遅れ

下関市 国弘半休

野球人生観(四句)

猛攻のバットへ拗ねてハイフライ

三振がしりぞきバットで地を叩く

ウロチヨロウロチヨロシヨート気忙しい

外野手の吠えてる割に球は来ず

笠岡市 木山遠二

墓まいり長生しとる人と遇い

乳臭い嫁に姑押えられ

蚤逃がして思いきりくやしがり
野菊あり仰げば秋の空があり

出雲市 尼 緑之助

ちぎれ雲焼けてぶどうは垂れ下がり
遠花火ここは日暮れの蟬しぐれ
簾の目砂のいのちを呼び返えし
いかすところ見せるつもりのこと事故

呉市 林 野 甍 光

旅日記より

石廊崎太平洋の波を躍ね
伊豆の酒あじのたたきへ添うわかめ
富士の雪なめて自慢の種にする
千仞の谷見つからずバスの旅

門真市 福 島 鉄 児

産め産まぬとはどたん場に來た台詞
電話口商売用の声になり
居留守とは思えど弱味ある立場
母一人子一人母の尊くも

大阪市 中 川 滋 雀

人道で市政届かぬゴミを燃し
確かめて郵便番号書き違え
罰金刑ぐらいで教育ママくじず

猫の飯までレジャーの留守を頼まれる

大阪市 吉 岡 美 房

補聴器を外し雑音から逃れ
飲み干して量感消えし紙コップ
落選を待っていました逮捕状
斗争という字が悲しデモ警備

富田林市 川 端 東 雲 楼

笑われた古稀の接木の柿のりの
独身の弁身にしみる事のあり
医者替えて替えて結局元の医者
老友俳人の死おもう
共に妻亡くして泣きに來しものを

玉野市 小 谷 仙 山

笑わせて置けと奥歯を噛んでいる
むかえ傘後の虹に笑われる
有りもせぬ事まで他人知っている
盆踊り昭和に成って月がない

藤井寺市 西 い わ を

看護婦に起こされていた昼の夢
結局は釣書のいらぬ人へ嫁き
親娘でも勝手すぎると思えども
兜虫斗牛ごっこさすも暇

ハワイ 築山快夢起

草莽の微臣が叙勲悦に入り

妻なればこそネクタイの色好み

問題はこの娘一人と親心

御実家とは訊かれ奥様御茶濁し

岡山市 服部十九平

水汚染河童公害がなりたて

じゃんけんをさして家裁は決めてやり

妊避妊薬自動販売機で儲け

家裁での勝が不幸の基となり

青森県 木村涼人

大臣は甚だ遺憾に思うだけ

屑りんご所詮津軽を墓場とす

踏みしめて小刻みに行く五十過ぎ

星きれい何処かで唐もろこし匂う

鳥取市 河村日満

従兄を見舞う

二十年ぶりの出会いに山とかけ

新和歌浦にて

まあついて来いに従う宿の下駄

福井九十九橋にて

勝家の悲憤臉に橋のいろ

腹はまだ話しておらず酒まずし

大阪市 後藤梅志

微醺帯ぶまだ老給を享ける会

つゆ晴れ間眼鏡のたまもうるみがち

長生きをするメダカの水を換え

大陸柳人同窓会を讀す

大陸同人腕っぷしならまだ老いず

大阪市 山川阿茶

ジャズ調でなる風鈴のやかましく

欠航でキャンプ淡路に居続けし

避暑よりもシミーズ裸で野球見る

出し惜しみ嚙んで吐き出すよう云われ

倉敷市 本田恵二朗

汐風の執念松を地に這わせ

模造あわれ光りを反射しそこねる

気晴しに來た砂浜でけつまずき

タレントの憂うつ私の夜が無い

倉敷市 木村千容

呆としておれば居られるわが余命

祈っては見たが身替許されず

心柱を失うて

大空を恋しと思ふ鷹に似て

虚脱から腑抜けに移る過度期です

岡山県 田村 藤波

老妻ついに他界

点滴も酸素も寿命には効かず

遺言はおやすみなさいと言っただけ

老妻は散り果て花は咲き誇り

不足ない齡に未練がまだのこり

岡山県 浜田 久米雄

ひと筋にわたくしだけが歩く道

み仏のころになつて許しとき

ご先祖の法事みんなが来る便り

夫婦とも平均寿命にほど遠し

京都府 大鶴 喜由

雲の色雲の流れよ秋近し

泣く泣くも女相手の動きを見

投資した割に女のすげなくて

まだ無心云うには男酔い足らず

大阪府 金井 文秋

使わさなんだホステスを指名する

あきらめにしては少々貸し過ぎた

生活が向上をしたごみの嵩

我が娘と比べ姑の愚痴

大阪市 児島 与呂志

地下勤務二十四時間振りの陽

簡単な話を複雑にして委員会

子をパパに叱らせといて教育ママ

太陽が知っている雲の峯の中

大阪市 宮尾 あいき

見舞客ひょうし抜けさす快復期

プール焼けと云う事にして娘をかばい

せめてものもてなし窓から風を呼び

月さえてゴーゴー踊も輪へまじり

大阪市 川口 弘生

生きる為蟻は堤に穴をあけ

口の辺剃りだしてから客静か

子が妥協してると知らぬ親心

買われたる金魚生餌とは知らず

竹原市 小島 蘭幸

寄り添うて歩いてすでに恋でなし

野心作ライバルだけがほめてくれ

途中下車してみて逢わぬことにする

珍客へ娘は二階から下りず

宝塚市 小島 無聖

ちよっぴりと殺し文句の調味料

肉体を秘めて六十の細ズボン

痛いほど迫る詩情が句にならず

ざっくりと裂けた心が縫いきれず

愛媛県 渡辺 曉 童

だまされてみたい女に会わず古い

停年近づく(二句)

身がまえも力みもいらす日は枯淡

敗戦を思えば年金多謝 謝

母にはしる余地がなし

好きでこうなった姿の蠅取紙

今治市 越智 一 水

路郎 忌

三回忌つくづくあおぐ雲の峰

信州の旅松本で

旅先のここともやってくるデモにあい

上 高 地

絵はがきの通りにうつす河童橋

霧ヶ 峰

高原はもう秋風が目に見える

岡山県 藤原 秋 月

食欲の秋大阪へ旅をする

番犬は信頼されて居眠れず

遊覧も参詣人に数えられ

負けん気が手遅れにした手術台

堺市 新谷 笑 痴

熊本城にて

覗くからわたしも覗いた城の井戸

阿蘇山にて(二句)

夕霧の牛の声する草千里

中岳のなびきは阿蘇の明日は晴れ

本心に触れて来そうで話題変え

宇都市 平田 実 男

京阪神を旅して(四句)

大阪城にて

秀吉の気持にさせる天主閣

ステテコで朝から酔えるも金ヶ崎

バス賃の倍ほど拝観料がいり

腰掛の固さ汚職に遠い椅子

富田林市 岩田 美 代

へのへのもへの書く指先にある空虚

現実を承服出来ないもどかしさ

やけくそが小びん一本もて余す

不覚にも出された晚餐息をのむ

ハワイ 羽佐間 柳 葉

戦後派に身は鴻毛が腑に落ちず

両方へ花を持たせて仲直り

膝崩せと言わぬ主人に痺れが来
娘の末を案じてこそその母の愚痴

倉敷市 井上旭峯

遠足の孫に付添う日本晴れ

初物が箱入娘のように来る

貧乏が派手に投げてお賽銭

本当に怒れば悟るものがあり

大阪市 早川清生

月のない夜を五百羅漢のオーケストラ

こんな女をはらます奴がいて産科

辻々に祠 今なお貧しい村

笠岡市 木山要次

源平の寿永を偲ぶ沖に釣る

慰めてあげたいけれどきれい過ぎ

泣きどころどころもあって陸じく

和歌山市 垂井葵水

道具屋は仏の足の裏も見せ

帰省した土をはだして確める

有名になって酔ってはくれぬ人

新居浜市 安藤桂仙

二番茶のように停年あつかわれ

風鈴も固唾を吞んで待つ台風

米価高ここまでついてこいと言う

守口市 羽原静歩

コマージュル値上げのことはふれてなし

ポンコツのようにスナップ写される

台風は近し食パン売り切れる

東京都 石居高志

かけひきの嫌い同志が探り合い

マスコミを恐れる程に企業伸び

ぎりぎりの線で理性に邪魔をされ

倉吉市 奥谷弘朗

うその世へこんな笑顔の出来る人

尻込みをするがほんとは出たい腹

貰い娘に婿をもらえば出てしまい

堺市 青野遊仙

控えてる積りでしゃばり好きな人

慣れ過ぎた職で寸法間違える

嬉しさは朝から用の無い電話

香川県 岡田拳法

自棄になるまいと希望に挺子を入れ

金に縁ないのか妻も薄い手よ

米の質言うほど戦後遠くなり

鳥取県 森田布堂

土砂降りの舗道ネオンの色が跳ね
一級酒に酔う頃二級に換えられる
使い込みして心中のいい度胸

岡山県 横山一声

お墓だけ残る故郷が遠くなり
カラーテレビ見ながら集金ことわられ
新築の暮しへ借金追っかける

京都市 松川杜的

天神祭

振り向けば丁度よかったあげ花火

植物園にて

水草を動かし池に鯉がいる

完敗の記事は読まないファン心理

高石市 谷沢好祐

顔違うように鉛筆の削り方

穴だらけの服をレースと申し上げ

コンクリートの容器で人間泳がされ

大阪市 木村水洞

孔孟の教え守って世に合わず

本当の事を云うのにいる勇気

肩書を持たぬ同士の縄のれん

倉敷市 水粉千翁

寝転べば娘の知恵という枕

抵抗をせぬ娘へ背中向けて泣き

さて明日のこの娘へ腕を組み直し

大阪市 天正千梢

富には縁なく和を保ちつつ老い

合掌をして朝顔の芽を切りし

苔寺の苔の起伏が目にしみる

豊中市 寺田花宵

灯を消して夏の小虫に出てもらい

戸締りに女世帯の念を入れ

短冊が揺れて鳴らさぬほどの風

大阪市 水谷竹莊

料亭で唄う小唄は高くつき

すえ膳をほめて嬉しい妻の旅

金ですむ女の世話をまだする気

伊丹市 小川静観堂

移植心臓のように彼女に果喰う僕

姿勢正しくして孤独なにもせず

男女中性のほかに痴女ブーム

熊本県 有働芳仙

教育ママパパより偉くなっとくれ

心臓移植他人の脈が打ち始め
貰うてきた風鈴団扇で鳴らしてみ

竹原市 山内静水

生きてれば二十隣の娘も二十
皆内の孫です嫁です平和です
足跡の溜りへ生きているメダカ

美禰市 安平次平道

大ジョッキああ胃袋の大きさよ
チャンスさえあればと狼にもなる氣
方便の嘘さえ善人顔に出る

大阪市 河井庸佑

子のプラン親のプランの日曜日
すじ書きがあるかの如きホームラン
本当はつめたい人と今わかり

大阪市 福井野迷路

にこにこと癌の死を露知らず

高野山

これ石よ大師もこうしてお掛けたか
声変り後ろ姿も生き写し

兵庫県 河原みのる

夫のわる口相槌うてばおこらはり

伊香保の旅にて(二句)

富士見峠見えるつもりでバスガイド
年とった浪子と伊香保の山に佇ち

東京都 大山雅城

炎天の蚯蚓を溝に放ちたり
或る時はクンあるときさんをつけ
わが肩に諸天善神つき給う

小松市 関戸宗太郎

新患のベッドは花屋ほど飾り
再手術して付添をまだるがり
見舞い客どれも赤銅色の肌

熊本市 楠田英子

気休めの病名とは知らずよくしゃべり
腹ただし満腹らしい蚊がはなれ
妻の目くばせ だまされるなど力入れ

出雲市 野村岬月

起られぬ狸寝入りはあわれなり
扇風機かけて鏡台持久戦

初盆の友に

おいキミの分だよ一息に飲んでやる

兵庫県 遠山可住

なまくらな男に犬がようなつき
とつ辯へ酒のききめのすばらしさ

榮進へ女きっぱり言葉交え

岡山県 大森娛句楽

親展も母には判る女文字

倉敷市 松下梁水

ご満足でしようと二日酔いを責め

ほめられる子をけなすのも親心
蟬時雨詩作に耽る目をつむり
錯覚の宿の南へ陽が登り

高野山にて

松江市 中川晃男

ご先祖に詫びる高野の水せがき

表から裏へ見透かす夏の家

高槻市 山田季賛

肩書が無ければつき合いよい男

まっ直ぐに向日葵孤独な影をもち
先立った不孝墓まで洗わせる

青筋を立てる勝気を笑われる

泉大津市 高津徹也

出来上り型枠のまま木目つき

笠岡市 松本忠三

身の上を聞いてわたしをどうする気

耐病のせめて月傘に夏らしく
初節句せめて予算のある限り
折からの雨が二人の縁となり

当直がねばけた顔で異状なし

倉敷市 小幡里風

就職が決まり三学期は遊び

桜井市 岩本雀踊子

腹立てた損をはいてる竹箒

先頭を追い抜け妻のアドバイス
売り惜しむ売りもの結局売れ残り
人間の弱さ枕がぬれている

古里はいいなあ朝の車井戸

大阪市 今西章雅

晩年は幸福になると云う手相

芦屋市 丸川初甫

一枝を落す思案の花鉢

サイケ調昭和幕末説も出る
同情はするがとじっとみつめられ
我が票も道化となるか政治劇

ラッシュ時一目でわかる迎え傘

奈良市 村上春巳

古寺の庭皆遠州の作に見え

台風を可憐な花が耐えている

稲妻に平城宮跡の広さ見る
ビヤホール南円堂の裏が見え

姫路市 隠岐不酔

台風め僕の家まで知っていた

貧乏神いつまでうちに居るつもり

進水に労資揃うて汗を拭き

平田市 久家代仕男

仁王さん入陽まともに鼻が焦げ

照り続き葉裏に堅い蝸牛

安宿の庭に風雅な糸瓜棚

八代市 永松道雄

神妙に連れ戻される夜の道

本心を曝けて軽い二日酔い

否応なし組織の檻に封じられ

大阪市 宮地双楽

愛情のズレが二人を引きはなし

都会人皆スモッグの色に染み

アドバロン誰に媚びるか秋の空

岸和田市 葛城伊三郎

花に舞う蝶にも色の好きこのみ

ステッキで道尋ねられ黙ったとき

激流も汲めば器へ素直なり

守口市 村田瓢太

脱げども脱げども暑さ薄らがず

立吞屋のれんの下に並ぶ尻

若さなりやこそあの荷物負い山へ往く

堺市 高橋千万子

ミニスカート花火の中で蚊をはらい

遠雷に一雨ほしい空が晴れ

眼の合図きき分ける子で病みつづけ

和歌山市 西尾公作

夫婦げんかしてまで他人の世話をやき

ご先祖の仏壇2DKもてあまし

釘一本打てぬマンションせまく住み

ハワイ 上田紅溪

夜は更けて月が上ったキャンピング

もう一軒建てて置かねは後日もめ

商魂はサンデー半日店をあけ

ホノルル 加川カロ

泣虫も蔭陽二つの型があり

表情もかえずぱりと言ったのけ

虚栄心みたせば家は火の車

松江市 柳楽鶴丸

九時消灯ふと軍隊を思出し

斗病より禁煙と斗うつらい日々
ただ何んとなく頼りない女医さん

西宮市 島居百酒

孝行の初めは年忌を勤めあげ

タコ配と見えぬ社長の乗用車

名月へ下戸も一緒に行くと言ひ

小松市 馬場魚山

飲み仲間おんなじような量で酔ひ

亡き妻の煮物の味が失われ

車の切れ自忍者の如く横断し

倉敷市 川端柳子

和の中に混じる苦しさ胸に秘め

貧弱と云えどバラにはバラの色

声きけばやっぱり女かと思ひ

岡山市 池田古心

旅をする暇には釣りとよくも疑り

膝枕本当に眠るわけでなし

奈良市 宮口笛生

のみに行く話男はよう貯めず

座敷迄あがつて蟻は殺される

岡山市 江国幽谷

失礼なところを望遠鏡が見せ

病氣した人の見舞が身にしみる

鳥取県 青木遊星

税務署が私だけをいじめに来

つまらない事にも腹が立つ暑さ

松江市 岡崎祥月

まるい和の中に生きぬき日日たのし

自慢ではないが白髪がふえてきた

豊中市 米虫一乃字

良い腕を持って大工の飲ける口

占いが恐いのではない恋をする

神戸市 仲 どんたく

すし握る形もまじる阿波踊り

2DKよりひどいなと金魚云い

大阪市 西川誓二

初孫が立った立ったと一騒ぎ

秋の道しばし公害を忘れさせ

和歌山市 土谷城石

税金を汚職分まで集められ

月末を待たず帳尻零になり

加賀市 細呂木魯木

虚栄にまけてケチが崩れてき

栽培に温い野生も競ってる

鹿児島市 土岐トク子

亡き妻の植えしガーベラ庭いっぱい

浜木綿の潮騒にゆれ淡き恋

★

西尾 栄

ボロクソにこきおろしてるとこへ涼みに来

見渡せば月賦月賦の中で住み

ステンレスのキッチンやっぱりこおろぎないてくれ

宿命でございますと女のあきらめる

恋をしましう句があれて来ましたよ

北川 春巢

ぼく肥満児よとテレビを離れない

喪主の耳へは枕経短かすぎ

裏の裏の裏まで読めと励まされ

きょうはちと勇み足する気の会議

次男東京へ転勤

上京後ノーニュース イズ グッドニュース

若本 多久志

老婆と二人お父さんと呼んでくれ

どの部屋にも老眼鏡を置いて閑

始皇帝の気持もわかる本を読み

墨をする気持ち君等にやわかるまい
おおそやそや貸しとった金返り

菊沢 小松園

遺言はない筈何も残こってず

鍵の手に住んで嫁はん簀規み

波がしらに裏返えされた貝だった

みずむしの無駄と思えるほど廻り

抵抗の限界貝殻堅く閉じたまま

清水 白柳

チエコ問題起る

大東亜共栄圏をふとおもい

飛弾川バス転落事故

川底へバス引き入れるレジャーの魔

赤黒黄土は悲劇の肌を見せ

川村 好郎

台所へ耳打ちしとく飲みっ振り

あきらめてすむ心配はしれたもの

犬でさえ心がうつるじゃれっ振り

ゆるされていてこそ今日の我があり

ご無沙汰のハガキ書き終え暑いこと

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

はじめにも不運の体験だけ重ね

貧農の汗米の値はボスまかせ

裏切つてそれでも言い負けない強気

せつかちの話し素振りへつり込まれ

大洲市 米 沢 曉 明

答案へヒントが欲しい子らの顔

指定席隣りへどんな人が来る

噴水へ二人ずつ夜となり

近所まで来たと手ぶらでやって来る

見えたら

高 鷲 亜 鈍

見えたらなにしかすか分らぬおまえ

寝ては夢起きてはうつつなにもかも

鉄柱を蛙の王子がおりてくる

鈴虫が一方向的に泣いている

コーヒ党まだまだ煙草やめられず

土台ごし殺られては損家にいる

今治市 長 野 文 庫

金台の値打と真珠馬鹿にされ

髪染めて一層小皺がよく目立ち

見て貰う気で咲いている花でなく

今治市 月 原 宵 明

ユーモアが解せぬままに仲違い

どん底の耐は片手で呑む茶碗

サンガラス浮世はばかる人でなし

和歌山市 秋 月 宏 方

倒産の社の下請の社に勤め

アリバイで奥さんきょうもごまかされ

きょうの式過去は知らないままでよし

歳時記で見る先人の情細か

女泣いているとも知らず酒の愚痴

やめてくれ盲めがねを買うをみた

虫鳴きやめば雨の音風の音待ちどおし

フィクションは骨と皮を約束す

公害も自害も人は人

心には世界があると教えられ

光りと質心にありて活かされる

めしいても右と左を誤またず

真玉をみがくに肉眼惜しからず

猫の目の光りとどかね闇に住み

純粹の瞳悔なし恋した目

小松市 山 上 千 太 郎

値上りの世にして混み合うマーケット

口に出せば角の立つもの日記にし

母性解放湯けむりの中の婦人会

お任せをします姿で脈とられ

えらい人らしいのでおじぎしてあげる

上田市 金 子 吞 風

乾杯を待たず末席も始め

人間がまるいだけいい左遷の地

水死事故川原いよいよ暑うやけ

名古屋市長谷川 鮮 山

それでいて食えぬ実働十時間

指先で小さくくるんだ薬包紙

黒黒の連続がわが進む道

くろい雪に足跡残す雪男

黒黒黒真一文字を太くひく

寒行に酒と煙草が断ちきれず

よるがきてよるがきてまたよるがきて

心眼へ痘癰玉が炸裂し

首のないフリージャに巫女うつる

足のない堅き額につきあたり

妖怪としかおもえぬ空から声ばかり

吾ゆかん一本刀を腰にさし

眉あげて光りに渴く日の喘ぎ

川傍柳 初篇研究

(六十四)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義故 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

510 おびんずる嫁どふしたか腹を撫

龜遊

前田||おびんずるはびんずるの敬称。十六羅漢のひとつ。白頭・長眉の相をそなえており、本堂のわき等に安置する。俗にこの像をなせて、病の平癒を祈願する。腹をなげたのは、胃腸病などの快復を祈るのでなくて子を得るようにとの願いである。「嫁どうしたか」がよくきいている。

岡崎||賛。病人が自分の患部をおびんずるの該当所を交互に撫でて平癒を願うと、おびんずるがその病気を引き受けて治してくれるという俗信があったのを、この嫁は勘違いして、子種を願ったもの。スジ違いである。

高須||あながちスジ違いでもなく、そういうことを祈願するスジも多かった。浅草観音堂の前の線香の煙を、頭部へ頂いて勉強

家になるように祈る学生が当世でもある。

丸||賛。「どうしたか」には、スジ違いを笑う気待があるように思われる。

岡田||同。

511 嫁芸にかけてハ瓜が長ひ也

長笑

前田||何もとりえはない嫁であるが、芸ことには長じている意。嫁の芸事では琴が第一であるから、琴爪を出して、長じていることを爪が長いといったまでである。句のうらに姑を感じるところ、かなりたくみである。

高須||爪が長いを、琴が上手と解したのは上品だが、どうもこの句、それではつまらぬ気がする。少し下品だが朝婦りの亭主の顔などに、いつもヒッカキ疵があるという

「芸」がある嫁……では如何?

丸||全くつまらぬ句なので高須説のように

も解したくなるが、礎稿の通りでよい。

岡田||同。

512 番号桶情好平ラへ詫をする

秋紅

前田||「情好平」は「精好平」の誤字。番手桶は水を入れて持ち運びする用の手のつけられてある手桶で、見附番が打水に使った。精好平は絹で織った椅で、ここでは、この椅をはいた侍。見附番の打水が精好椅をはいた侍にかかったので詫をしている。見附番・侍といわずに桶と平を出したところが面白いが技巧的で素直ではない。

岡崎||賛。見附番のうちでも下番の大役が打水であった。炎天などには殆んど一日中水を四角に打ち続けていなければならなかった。

高須||精好平とは、練糸を縫とし、生糸を緯とした絹織物の誇地で、厚く美しく、文

字通り精好なもので、相当よい侍でないとはなかつた。だから番手桶で番小屋のオヤジを精好平で供をつれた立派な武士を表わしたもので、ボクは面白い対照と思う。

齒の生へた袴で守る番手桶

丸丸磯橋磯橋。見付の打水は岡崎説の通り大へんな仕事で、本句のようなそそのないように武士が付いて注意していたのであるが、まま誤ちもあつたものであらう。なお高須氏オヤジといつてゐるが、見付の撒水はガエンの者その手下の若い者であつたといふ。

岡田岡田賛。

513 おせきさんまだまりなと両隣

亀遊

前田前田「おせき」は咳をする女。この句では「だまりな」で、同情的でなく、肉身的でない他人の「おせき」に対する応対。

岡崎岡崎賛。長屋なので、壁一重で一夜中、こんこん咳かれてはたまつたものでなく、両隣から苦情がくる。

清清うるさいので同情ばかりもしてゐられない。

藤井藤井「又もはじまつたうるさい咳。定期便の咳に対する苦情。」

高須高須「いくら長屋の連中でも、病気でセイている娘に「だまりな」とはいうまい。と

くに「まアだまりな」だから、これは夫婦ゲンカを両隣の家から止めにしたので、まア細君の方へ「まアおだまりよ」となだめてゐるところ。「おせきさん」は「なんだい手前勝手のことばかり言いくさつて……」とセキコンでゐる細君を、そう呼んだのであらう。

丸丸高須説の如し。

岡田岡田同。この句の「おせき」は咳をする人ではなく、いきり立つてゐる。せき込んでいる人を表現した擬人名。

514 流し目で娘弓矢をうちつがひ

東弓

前田前田この娘は、弓矢取る女、即ち矢場にいる売笑婦である。だから「流し目でうちつがひ」である。常識的な句で得るものがない。流し目で遊客を求めている感じは出ているが……。

清清神社仏閣の境内に、土弓場と称する遊場があつたが、そこにゐる女が矢場の女として売春をした。

藤井藤井「一眼は的を、一眼は客を一矢二鳥との媚態。句もしまつていて佳句と思う。」

高須高須「ボクの学生の頃、まだ浅草公園五区地内に揚物店があつて、小さな一尺位の弓を射て遊んでいる男達を、僕は面白がつて窓ごしに見たことを覚えてゐる。」

丸丸賛。

岡田岡田同。（但し、矢場女の中に売笑した女もいたであらうが、その全部ではない。

ただ、客よせに看板娘をおいたので、その美女の媚態と解すべきです）

515 タアも公の御噂と本田い、

青峨

前田前田公は貴公の洒落言葉。本田は当時流行の本田マゲの略で通人に喜ばれた。ここでは本田マゲを結つた遊び仲間で、句意はあきらか。かなりたくみな句。

岡崎岡崎髪結床など、どら息子の集会、連絡場所等類をもつて集つた本田鬻蕩児の連中駄弁。あまりうまい句とは受けとれない。

藤井藤井「こういつてへつらう奴は、文無しのかかり専門にきまつてゐる。」

高須高須「古川柳のアテ字もいろいろ見るが、このタアがどうして「ゆうべいなのか？ 昨夜で「ゆうべ」なのだが……」。既出夕部の略字欠が「ア」になつたのか？

丸丸賛。「夕部も公の御噂」は藤井氏のいうへつらつてゐるのではなく、どら仲間の単なる挨拶的な会話の一節である。

岡田岡田賛。（アは部から出た略字で、当時の常用字です。）

43年度路郎賞受賞作品

似て居ない父に

足音だけが似る



笠岡市山口

木山 遠二

略歴

大正五年作句を始め、大正十年川柳阿倍吟社を結成。昭和二十七年川柳並木会を結成。昭和三十三年不朽副会員となり現在に至る。

但し其間に於て、入宮、朝鮮在任等の為、二十五年間の空白があり、実際に川柳への留意は二十八年間。

明治三十一年二月一日生れで農業、家族は目下本人夫妻と三男夫妻の四名

路郎賞発表

中島 生々庵

第三回ともなると担当の選者達も平素からの準備を整えて月々怠りなく、これはと思う句にチェックしたり年間を通じての句主の動静を見守ったり万般に研究を続けている。従って毎月の私の選に対する眼も相当にきびしいものがあることも承知している。私は路郎先生の長い年月に亘るご遺訓を守りながら選者としてのあるべき姿、なすべき心構え等の勉強にうきみをやつしているのである。勿論先

優秀句

似て居ない父に足音だけが似る

木山 遠二

父は亡き父と見たい。いい点も悪い点もあらゆる点で父とは対蹠的な子である。それが母親にとっては時に不安でもあるし、又時としては慰めでもある。夜遅くでも帰って来た靴音に、ふと父親そっくりの錯覚がかくし得ぬ明るい感じの中に、重くるしいものを句主から伝って来る。而も毛でつくほどの銜いのない十七音字である。

準優秀句

添わしても根じめの花はあっち向き

西出 一栄

炎天をテクテクと自嘲する

工藤 甲吉

選 後 感

北 川 春 巢

推選句 (一句)

炎天をテクテクテクと自嘲する

甲 吉

準推選句 (九句) (推選順)

(1) サングラスとればおほこい顔である

(2) 旅先の雨は主題をかえさせる

静 馬
古 方

(3) 恋だなど女の歩巾からわかり

一 水

(4) 言論の自由NHKに締めだされ

一 三夫

(5) ビタミンを飲み飲み土曜へ辿り着き

どんたく

(6) 神輿の先頭は社会党員である

清 生

(7) 示談屋がむちうち症にしてしまい

宗太郎

(8) 七人の敵に構える廻り椅子

柳 志

(9) 修繕のまだ効く身体カメラ吞む

一 保

推選句十句を選出してホツとした気持だ。わかって頂けると思う。

吉田水車氏が先月号の本誌に、「柳翁の選句スピード」について書いておられたが、選をする場合は、このような平均値ではないわまい。短時間に全精神を集中しなければならな

いと思ふのである。

十二冊の雑誌の句をいっきに見るわけにはいかないが、とかく日をかけると、選者のその時その時の気分によって選に差ができるおそれがある。私は七月中頃からはじめて一冊分はまとめていっきにやった。そして選出した句は書き抜いておいたのである。やはり月によって抜いた句には変動がある。最も句の多い月で十七句、最少は七句で、年間合計一五二句となった。月平均十三句弱というわけだ。この中から、こんどはジツクリと選をしたのだが、それでもその中から十句を選ぶことはむずかしい。一応選者生々庵先生の目を通り、こんどは私が抜き出した句である。その中からどんどん捨てねばならない。そこで各月の中から三句宛選び計三十六句にした。各月から一句宛取っても十二句になる勘定だ。私はそのようにして第一回の時は十二句を推選したが、こんどは思い切ってその二句も捨ててしまった。

私の選の仕方をご披露してもセンないことだが、一応書いてみた次第。最後は無記名にして選をしたのだが、後で句主を見て、いずれもベテランの句であったことに驚いた。

推選句は、かなり多くのことが省略されていて、しかもその情景、主人公の心理が浮き彫りにされている。推選に値する名吟だと思ふ。

なお「生命ある句」という点では(6)の「社会党員」(7)の「示談屋」「むちうち症」(9)の「カメラ」など、後世ではわからぬ句になってしまっておそれなきにしもあらずの感がないでもない。

だが、いずれも現代社会の川柳という意味で推選したのである。

苦 楽 の 十 句

西 尾 棗

年に一回のことながら楽しいやら、苦しいやら、せめて百句位選れと言われればとつくづく思う、結局最後に私の持論の比較的新しい人の句を選んだ。選者級よりおろしき人、聞いてみれば高利を借りており

森本法泉子

六段の調 訪日団のお気に召し

松川 杜的

台風とも知らず風鈴はしやぎ出し

宮尾あいき

ライバルの落目人ごととは言えず

川端東雲楼

此の職も一代かぎり百舌鳥が鳴く

白井三林坊
ほんやりと立てば犬にも見上げられ

大江 秋月

ふるさとを捨てふるさとの詩をつづり

奴田原紅雨

逆縁の愚痴ばかなやつ馬鹿なやつ

水粉 千翁

コンピューター自社の倒産はじき出し

垂井 葵水

推薦句

世話をする人あり地蔵美しい

本多 清人

別に解釈をするほど、むずかしい句ではないが年に一回の地蔵盆以外は忘れられがちなお地蔵さんを町の四ツ角などで、しばしば見受けるが、このお地蔵さんは何処の誰だか知らないが、何時もいつも綺麗に掃除をし仏花の一つも上げられている一市井の些事を見のがさず、而かも気どらずに、うたっているところまこと川柳らしい、川柳として推薦することにした。

珠玉十秀

菊澤 小松園

推薦句

人間は愛しあうもの陽は一つ

不二田一三夫

天体も住みにくいのか流れ星

吉田 水車

人間の顔してるのにひっかかり

奴田原紅雨

スト声明長がなが誰が読むものか

都倉 求女

ただのぞくつもりへ自動ドアひらき

工藤 甲吉

むきあえば素直にとける角砂糖

久米奈良子

商売人泣かせた嫁の荷と知らず

山川 阿茶

わたしとてやがては消える一としづく

三井 酔夢

添わしても根じめの花はあっち向き

西出 一栄

肩先へ噛みつきそうなザクロの実

若柳 潮花

一年間の毎月の沢山な佳句、それは眼に余る幾多の佳什の中より十句を選び出すことがすでに無理な注文と言う他ない、毎号の雑誌からチェックしたものを寄せると六十四句あった。それを半分にし苦勞して十句に絞り上げた中には最後まで取捨に迷うもの、全く暗胆たる後味の悪いものがあった。その十句

の中から順位を付けることもまた至難中の至難と言わざるを得ない、甲乙を付けることがすでに又無理なのである。強いて言えば自分の好みに合った句を推すより他に方法もない即ち自分の好きな句である。これなれば推せるし責任も免れる、好き嫌いは人間誰にでもあるからである。こんな場合の句は所謂句の柄の大きい方が徳なようである、上手な感心させられる句でも身辺雑記的な句柄の小さいものは損のよう思われる。

この点第一席に推した一三夫氏の句は大きく多少張ったり気味はあっても時代にマッチした国際連合の宣伝にもなりそうな句で、そうかと言って決して泡沫になって時間が経てば消えるような時事吟では決してない。第二句もロケット時代月への旅行も話題になる昨今を反映して住み難い地球の上を宇宙に見立てた処、なかなか老練、句主の健在を喜ぶ第三句の初五の痛快さにこれこそ川柳の持つ独得の味と言いたい、この犬畜生にも劣るものに利用されだまされたのが人間だから面白いのである。第四句の痛快さ、第五句の文明の利益の不自由さ、第六句の純情可憐さ、第七句の皮肉さ、第八句の諦観、第九句の、繊細、第十句の、此喻の面白さ、それぞれに句主の持ち味を生かした百花燦乱誠に川柳塔であり、川柳覚である。

路郎賞候補句

清水 白柳



大阪は食べるにおいのするところ
知人ぞ知るよろこびを妻と分け
金持ため安心感が眠りこけ
食ってばかりここ掘れここ掘れとは吠えず
他人一人住んでわが家の香が変る
寝押しして少女は何を企らめる

笛生 静水 恵二朗 甲吉 清生 千翁

夜のしじま明日は煮られる貝の私語
夫婦だけの日の膳 夫婦子を語り
人きらい秋ともなれば人を恋い
推せん句

十九平 日満 千梢

似て居ない父に足音だけが似る

遠二

路郎賞も三回目となると殊に重大さを感じ
るのでいろいろの角度から選考しなければな
らないと思った。

路郎先生の選句は作者に対するきびしい指
導であったことは吾々が身に泌みて感じてい
たことである。が、現在の私等にはそれだけ
の力はない、併しその教えだけはあくまでも
受継いでゆかねばならないものだと思ってい
る。

×

43年度川柳塔賞受賞作品

消えるか雪は刹那を
淨く舞い

八尾市大字中田一三四十一

高杉 不朽

候補句の十句はどの句も推せんしたいのだ
が、遠二氏の句を推すことにした。それはこ
の句の持つてゐる深さにひかれたのだ。作者
の訴えようとする真実感が十七字に溢れてい
て読む者の琴線に触れ共感をよぶものを持っ
てゐるからである。

千梢さんの句も佳かった。私の好きな句だ
が結びの一字が氣にかかった。「人を恋い」
のいである、これが恋うであつたら推してい
たかも知れない。「恋い」と「恋う」では句
の重量感に大きな違いがあると思つたからで
ある。日満氏の句も内容の点では申し分のな
い句であつたが、表現の上で何かモタモタし
たような感じを受けるので惜しいと思つたが
推せん出来なかつた。

略歴

昭和四十一年入院中川村好郎氏指導のどんぐ
り川柳会へ入会初めて川柳を教わる。昭和四十
二年三月退院後引續きどんぐり川柳会OBへ出
席、退院前後から近作柳傳へ投句。

川村好郎、清水白柳、橋本薫三氏に師事し
現在に至る。

大正九年四月十二日大阪に生る。会社員。家
族、母、妻、一男の四人暮らし。

「川柳塔賞」

発表について

若 本 多久志

川 村 好 郎

常任理事会において決められたように、選考委員六名が近作柳樽の一年間の作品からベスト一〇を選び、各選考委員の観点から推選句一句を更に抜き持ち寄り、その中から川柳塔賞として優秀句一句を私等二人が合議えらぶことになった。集った推選句六句と外五十四句の選考委員が苦心のあとを検討審議数時間にわたり繰り返した。

持ちよった推選句六句は全部作者も句もちがっており、同じ作者の同じ句を推しているものが無かった。しかもその推選句は推選句以外の五十四句の中に誰も抜いて無いのである。たとえ推選句六句が全部ちがっていても其の他の五十四句の中で誰かがその句を推しておれば、まず第一候補句として選ぶのは容易であるが、それが無いから迷った。従ってこの推選句六句の中から推さねばならぬ結果になった。しかも私等二人も選考委員として加っているので、一層この最終選考に頭を悩まし、ああでもない、こうでもない、遂に「該

当作品なし」とまで到ったがそれも不適當と考え、遂に思案のあげく甚だ無責任ながら投げ出し、この上は理事長中島生々庵氏にお願いして、最終選考をして頂く事に落ちつき、次の如く理事長によって決定された。

願わくば、来年は選考委員が揃って推選句として選び、何の躊躇もなく否応なしに川柳塔賞該当作品として推し得る優秀句が生れることを祈るもので一層の研鑽精進をおすすめ致します。

消えるから雪は刹那を淨く舞い

次点

高杉 鬼遊

このままで良いとつくづく思える日

増田 次章

銀婚へ曲りくねった道で着き

八木 千代

選を終えて

若 本 多久志

私は先代の社長から「君はヒューマニストだから、金儲けが下手だ」とか「事業の経営

者としては失格だ」と度々お叱りを受けたもので、自分では決してそうとは思っていなかったが、今度選び出した十句を並べてみて「俺はやはり、ヒューマニストだったのかなあ」と述懐せざるを得なかった次第である。

平素、句会の選をする時でも、こうした催しの大量選句に当っても、恩師路郎先生の「川柳は人間陶冶の詩である。従ってそこには哲学があり、人生がなければならぬ」という遺訓を頭において選をしている心算であったが、こうした結果になったことについては諸賢のご批判をも頂きたいと思う。

推薦句

貧しさを炊けば貧しい音で煮え

渡辺しげ彦

啄木のうたに流れる一脈の人生観を感じさせる名句である。

準推薦句(一)

入づてに夫の逝去聞くえにし

白井 孝子

人間の宿命にじつと耐えて生きている一人の女性を尊く感じさせる。

同 (二)

身ごもってこの生涯の重たさよ

梅園 摩耶

宿縁の絆を身ごもると言うことが、女性にとって如何に大きな試練であり、そして又、

そこに生きる喜びを感じさせる。
次点句

熱燭に不運を語りあう夜寒

平野 光道

地に還る枯葉は燃えた過去を抱き

岩谷二三枝

まな板のくぼみに亡母はまだ残り

八木 千代

のりきいた浴衣に亭主畏こまり

三宅 ろ亭

これも好きこれも好き母棺に入れ

河瀬 茂人

子の頭撫でて再婚ふみ切れず

坂上山淑坊

病む夫とせめて花見を語り合い

有田鹿の子

句の姿

市場没食子

推薦句

銀婚へ曲りくねった道で着き

八木 千代

評、この年輩ともなれば、夫婦ともドッカと家庭に根を降ろし、専ら子女の育成を楽しみに見守っているだろう。宇余曲折の過去をふ

り返りながら、そぞろ人生の昏を感じ始めるならん、定年制というものはよく考えたものだと思ふこともしばしばある。
準推薦句

さようなら心にたたむ京の夢

小谷 葉子

評、愛別離苦の悲しみは、想い出の中でも一番傷痕の深いものだろう。人は大なり小なりこうした悲劇の過去を案外に持っているのではないか、寂しさを表に出さず句の姿を整えられた手腕を高く評価したい。

縫える手を持つばかりに呼ぶ按摩

志賀 汀花

瓜染めて愛のしずくもない暮し

前田美巳代

振り向けば涙とならん歩を早め

岩谷二三枝

左手を怪我の右手が齒痒がり

志賀 木石

お年玉うちのしつけをぶちこわし

高野 不二

過去遠く近くわたしをもて遊ぶ

堀江 芳子

芸者の方が軍歌をよう知っている

鈴木村諷子

交換台秘書の知らないことも知り

藤井 春日

藤井 春日

選後感

去年川柳塔賞の選考で好郎氏が、「女流作家は花盛り」と述べられたが、私も同感で賛意を表していたが、今年も未だ尾を引いている感じだった。

去年は割合にすらすらと選が運んだけれど今年は三度も四度も近作柳樽を読み返し、原稿紙の書潰しをやたらと殖やした。

私はピカソ、マチスや前衛派の書も好きであるが、臆けながらしかその良さは判らない要するに判っているようで判らないのだ。それに比べると正統派というか、美しさが誰にでも判る絵や書の方が好きである。鑑賞者へ美とか、内容とかの説明が要るのは廻りくどいだけでも損だと思ふ。

川柳も短冊や色紙、軸に額にと、書けるにふさわしい句と言うことも心掛けてほしいと思う。私にそうした句がないだけに、こんな点にピントを合せて選をした。もとより私の独りよがりであることは承知である。

推薦、準推薦の句に寸評をつけたが。

「縫える手」の句にしても、なければ無いなりにすむものを、なまじ女の手職があるばかりに主婦となつてもの苦勞をよく詠じられてるし、「瓜染めて」の句、果報は寝て待てはもう古い、何んでもかでも積極的に出なければ、鳶に油揚げはさらわれる。

句の平淡さ

正本 水客

第二回の川柳塔賞である。初めに選出されたのは六五句、三八人であった、そのうち五句が一人（美已代氏）四句が一人（二三枝氏）三句が五人、二句が十人、後の二十一人の方が一句ずつということになる。

何もかも走るよ僕だけ歩いてる

あきらめなさいと波紋が消えました

競艇に軍艦マーチの阿呆らしさ

嫉んでいるのさえ解ってくれぬ人

停電かそうかと夫だけ動く箸

京ことは男を遠慮なく使い

たまさかに夫唱婦随となるゆかた

まないたのくほみに亡母はまだ残り

泣くことを並べてみてもみな他人

◇推せん句

このままで良いとつくづく思える日

ささやかな幸せと平和のなかに、足を知ら

る魂の安住を見出している人の心境を何のて

らいもなく詠いあげている。思わず見過して

しまいそうな平淡さを、この句に見出したこ

とは私の喜びである。

なお、十句の制限からはみ出して仕舞った

が次の五句の感覚は捨てがたい。

チリチリと星も寒波に耐える如
蜘蛛の巣の淋しきものにくも不在
ひかえめにきよぼりきよぼりと福寿草

まだ逢える人だからさようなら
レモンの香り新しい幸が欲し

これこそ川柳

戸田 古方

推薦句

春風を鯉の口して吸うてみる

坂東 若芽

思っただけでもうれしくなる「鯉の口」。こ

の上もなく可愛らしく、こみ上げてくる春、

春、春。見逃しそうな平凡をここまで高め、

川柳する喜びを教えてくれる。

候補句

① 仏壇へお茶熱かると吹いてあげ

大工 チヨ

底知れぬ愛情。川柳はこの世をこんなに美し

いものにしてくれる。推薦を迷わされた句。

② 女の皺を見せて笑っている鏡

明 嘉彦

鏡の擬人と見ては平凡、主客一体、正に隻手

の声である。

すばらしい
着心地

蝶 久
シャツ



③ 手あぶりを客に譲って小あきない

志賀 木石

枯れた句とはこんな句のこと。

④ 陽がいつぱいしあわせ一杯ふとんぼす

榊原 加代

桶の中の哲人は団地の窓にもおりました。

⑤ ふさいでもわらってもおれである

光武弦太郎

「汝自身を知れ」への誘いこそ川柳の使命。

⑥ 猫の恋お前はまたかと猫に聞き

川崎 秋女

ひそむペースが川柳へおい上げる。

⑦ 病院の屋上寝まきが手をつなぐ

岸本豊平次

斗病へふるいたたせる「手をつなぐ」です。

⑧ つぎはぎの紐で小包十二月 目賀芳月

上五が十二月をいよいよ十二月にする。
⑨秋の陽のぬくみ素足になって受け

乱れもすきもない。十句の中に入れずにはいられなかった。

心に通う句

橘高 薫風

今年の川柳塔賞候補作品には無条件に推せる程のものはなかった。それで、「該当作品なし」と一度は決めたのだが、少しでも斬新な作品を推すことが、川柳塔賞には必要で私が選衡委員に推された意義もそこにあるのだと思い直して、次の句を推薦することにした。

経るそうな石持って来て鳥の墓

中沢風太郎

句意は一読瞭然、可憐なる小鳥の死に対する憐憫の情が出ている。「持って来て」の表現に一考を要すると思ったが、心に通う句であることが強みだと云えよう。

京ことば男を遠慮なく使い

三宅 不朽

この句の作者は前年の受賞者であるだけに表現その他に難はない。唯、従来の川柳の味

それもこの程度のものであれば私には物足りない。

お土産はおどって見せる阿波踊

福村 新海

「お父さん、○○さんへのお土産は？」「○○さんにも要ったのかい。うちの分を回しておいたら。」「それじゃ、僕達のは？」「これだこれだ。みんな立ってこうして手を挙げて阿波踊りは誰にでもすぐ踊れるよ。」と云った光景が目につく。阿波踊りの特徴を端的に把握出来ている。

光りなき夫の風呂に灯をとます

堀江 芳子

盲人を夫に持つ妻の心理を表現した句で、これも心に深く通う句であるが、上五の表現に一層の工夫があればと惜しまれる。

お母さんの年齢をこえます除夜の鐘

別宮 すき

酒のほかもてなす術を知らぬ父

貴志 千尋

積む雪の下で人情育くまれ

八木 千代

帽子より日傘が似合う齢となり

中溪 慶彦

一筋のズボンの折目宮仕え

和田 痴亭

概して、批判句に力強さがなく、感覚句に

も、まやかしの底の浅さが多く感じられた。若い柳人の奮起を特にお願いしておく。

新進作家進出

川村 好郎

新進作家の進出めざましいのが何よりも嬉しい。五十数句から十句に選び抜くのに私なりの標準を立てた。なるべく平易な文字でしかも明るい、何か私の生きる道に教えられる深味のある句を選ぶことにした。

市制四十五周年記念

岸和田文化祭参加

第十九回市民川柳大会

日時 昭和43年10月27日(日) 午後一時

— 五時

場所 岸和田市民会館(お城隣り)

柳話 川柳塔社主幹

兼題 「明治」

「国旗」

「星」

「顔」

「手のひら」

「狸」

「席」

席題 当日三題発表(各題三句)

呈賞 市長賞文化協会賞きしせん賞各題

秀句賞

投句先 岸和田市宮本町二六三

岸和田川柳会

一作家で二句も三句も抜きたい句。又捨てるに惜しい句がかなり有つたが、一人一句、そして十句と制限されているので心を鬼にして振り切った。

俸せな苦勞を子等がさしてくれ

堀江 正朗

云うまいと決めたところを誤解され

川崎 秋女

風船が破れて小さな自我終る

前田美巳代

夢一つみのり妻と握手する

古川 静波

思考零果てなき雲に我を置き

岩谷二三枝

濡れて来た新聞なれどとがめまじ

志賀 木石

旧姓を添えて賀状のよそよそし

谷垣 史好

断層の孤独を愛す花椿

小谷 葉子

川柳戦国志 (一一一)

豊 臣 秀 吉

(九)

富士野 鞍 馬

冬 の 陣

慶長十九年(一六一四)秀頼は、京都方広寺大仏殿の修理をして、梵鐘を鑄造した。そ

瘦せ細るまでをツララ的一本氣

森井 善居

鈍才の誠実軌道外れない

王 紫

やり手より誠実、それを社会どの現場でも要求されている。秀才、敏腕の士の軌道外れていることの多いことよ。この句に詩情が薄いのが惜しい。

推選句

消えるから雪は利那を淨く舞い

高杉 鬼遊

やがて消えるいのち、あの寒風に逆わず

淨く舞い降り降る細雪を捉え、一つの生き方を強く明るく詠んだ表現の巧さに打たれた。私の句に「真実に生きんこの一瞬も命がけ」というのがあるが足元にも及ばない詩がある。

題を持ちかけられて圧迫された。何ンぞあつたらの所へ鐘の銘

撞きもせぬ先に駿河へ響くなり

京の鐘つかぬ先から大へこみ

あらの出る長か口上は鐘のめい

鐘の銘切レが有のでやかましし

大仏の鐘はつかれて音が止り

大仏は尻みやのある鐘を持ち

撞かねどこの鐘関東へは響き

そこが鐘聲でも仲違ひ

仏語なら異音でよめと鐘の銘

大阪の威も入相の鐘の銘

鐘の銘作りし罪がきへぬなり

紹巴のやうにけづられぬ鐘の銘

安康と書たで鐘も釣し限り

あんこうの鐘はそのままつるしきり

安康は釣鐘でさへつるし切り

太平と書くと和尚に罪もなし

そこで片桐且元が、駿府の家康のもとへ赴いて、弁疏これつとめ、三つの要求をうけて大阪へ帰った。その条件の一つに、淀君を人質として、江戸八ツ山住居することというのについて、淀君は承知しなかった。不二の見飽きを致しましたと市之正

(コリ三二六)

(安七義三)

(三六四)

(明八仁二)

(六二二)

(一一九)

(明元礼六)

(一〇七)

(一四四)

(一〇四)

(一五二)

(三三三)

(四二二)

(五三六)

(一一七)

(九〇四)

(一三七)

(寛元誠二)

(明八仁五)

珍らしい茄子を片桐振舞はれ

(六三・八五)

淀まずに御うけ申す市の正

(四一・二二)

市之正二の足をふむ三ヶ条

(七四・一七)

淀を為替と御工夫の一ヶ条

(四三・二四)

片桐は質を出す氣で利を並べ

(六三・四)

市正質蔵に手間取る氣なり

(三九・一七)

六夜には至極のこと市の正

(二一・二五)

角たてず丸く取りなす市の正

(一一・四六)

市正且元は、極力淀君に江戸行きをすすめ

(一一・四六)

た。品川ハツ山に、淀君住居の御殿を造営す

(一一・四六)

るのに、注文をつけて長引かせ、その竣工ま

(一一・四六)

では、家康は死んでしまう。そうなければま

(一一・四六)

たこちらから打つ手は有る。今家康の三ヶ条

(一一・四六)

の申し入れを素直にうけておけば、豊臣家は

(一一・四六)

続いて安泰である。という且元の名案にもか

(一一・四六)

かわらず、淀君は怒ってこれを拒絶した。

(一一・四六)

よしあしにつけてもまれる市の正

(一一・四六)

片桐が為には茶々の局なり

(二四・二一)

釣鐘のいぼほどになる市正

(四三・五)

水車片桐質におくところ

(四八・一三)

片桐もこまるは質と鐘のこと

(七五・九)

片桐をあくに使つて大はたき

(安七・一)

下ると当る大阪の立おやま

(一一・三九)

市の男だに後室氣に入らず

(天七・天二)

淀君が片桐の意見の通り承知をすればよか

(天七・天二)

つたのであったが、ついに冬の陣となつたの

(天七・天二)

である。

且元は、駿府で家康と会谈の時、毒饅頭の

(七八・四)

饗応をうけたという話もあり、

(七八・四)

饅頭の其手は喰ぬ市の正

(三三・一〇)

あたたか饅頭喰はれぬは市の正

(三三・一〇)

下ださるものに片つきり手をつけず

(天四・二)

あんに相違にとらんだは市正

(五四・八)

市正あんにたがはぬ事を知り

(四三・一九)

片桐は初手から知つて居る男

(明五・九・四)

あんにそふいをさせたのは市の正

(三六・四)

と川柳はちゃんと詠んでゐる。その謀略には

(三六・四)

かからなかったが、淀君とその側近は、且元

(三六・四)

を家康へ内通者と誤り見たのであった。やむ

(三六・四)

を得ず且元は、茨木の居城に蟄居した。それ

(三六・四)

を攻められて、ついに元和元年(一六一五)

(三六・四)

六十才で自刃したのである。

(三六・四)

蟄居してそうめん斗喰で居る

(二五・三)

おしいもののふをひやそうめんにする

(二四・九)

— 茨木はそうめんが名産 —

(二四・九)

茨木の城で片桐手も出さず

(六三・三〇)

君君たらず茨木へちつきよなり

(安六・一三)

大阪で市の男をおしいこと

(二四・七)

秀頼は惜しい人物を失つた。これが豊臣滅

(二四・七)

亡の序曲といえよう。

(二四・七)

慶長十九年(一六一四)十一月、遂に手切

(二四・七)

れとなり、徳川の五十万の大軍は大阪城へ押

(二四・七)

寄せた。これが冬の陣である。大阪方は五万

(二四・七)

の浪士を集め、

(安七・義五)

浪花津に浪人どもが冬籠り

(安七・義五)

浪花津のうんつくどもが冬籠り

(天五・智二)

と川柳に詠まれている。

(天五・智二)

この戦いは、大阪方の屈伏によって和睦と

(天五・智二)

なり、茶臼山の東軍本営へ、大阪方の花形若

(天五・智二)

武者、二十三才の木村長門守重成が、単身乗

(天五・智二)

込み、和議誓文の家康の血判を受取る堂々た

(天五・智二)

る立派な態度は、敵、味方とも感心し、後世

(天五・智二)

までほめられてゐる。それを川柳も、

(天五・智二)

むつかしい判取のくる茶臼山

(二九・五)

呉服屋と陣屋判取大違ひ

(四二・三)

よろびの中をこわごわと美男行き

(天元・満一)

— こわごわは上下 —

(天元・満一)

大勢の返事に若衆一人り来る

(二九・五)

むつかしき鎧の中へ鬘斗目なり

(安四・礼一)

木村預り大阪の冬相撲

(二二・三)

大阪方で当てたのは使者ばかり(天三・八五)

(二二・三)

などと詠んでいる。

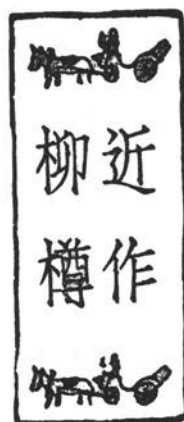
(二二・三)

秋田実主幸・不二田一三夫編集

川柳家に好評!

「漫才」 第三種郵便物認可申請中
百三十五円 (送料共)

発行所 大阪市生野区勝山通六ノ七九



西尾 栗選

小松市 四方天弘美

上ずった声で胸中見透かされ
胸借りて泣くに男の頼りなく
捕方のように手形が迫って来
蟻のような一日だったそれでよし
浜風に吹かれ年寄荷物番
一寸待て柳誌の封は俺が切る

広島県 岩谷二三枝

会者常離空逝く雲に似るえにし
女ひとりつまりは片輪でいるくらし
虹きえぬその束の間を夢に似て
水すまし今日のワルツに賭ける夢
灯を消して女蛇精の媚をもつ

亡父母の墓前にて

愚痴きいてもらうお墓の温かき

竹原市 三宅不朽

父となり母となり温故知新
かかるとき泣けぬ男の名に追われ
手花火の噂の女初々し
砂丘有情僕の影 君の影
ざくろ裂く指は男に見せまじき

姫路市 前田芙巳代

紫陽花の濃ゆく素足の女を恋う
トンネルを抜けて夫の尚無口
恋のカルテに漢字を見失しなう
風土病かも知れぬけつたいな男女
宝石の密語ひしめくオルゴール

京都市 明

嘉彦

冷蔵庫満たして留守を頼まれる
プールに腰かけて海の話しする

恨む氣と別に自分の馬鹿も知り

クーラーの部屋から逃げて祖母達者
おごられる方がタクシー呼びとめる

高知県 山 川 勝 子

暑い倍増我家の庭の蟬しぐれ

片仮名の多い世に明治困らされ
子に嘘はつくなと母は嘘の世辞
ステテコの馬では孫が氣に入らず

大阪府 和 田 痴 亭

せせらぎも滝へかかった音となり

古里の路で苦勞さんよ道おしえ
孤独にはあらずわが影われに添い
皺ふかく刻んで柳歴誇るなし

八尾市 高 杉 鬼 遊

空箱を捨てかね狭い家に住み

商用へ祇園太鼓を聞くめぐり
素うどんへ何ですかとは何ですか
爪赤くそれで女がつとまりぬ

松原市 谷 垣 史 好

ポリウムというはかはなしビキニ

挑むとはかくも雄々しきものなるか
よいしょと立てばよいしょと猫も起き

大阪城夜景

ネオンひたひたさながら敵の軍勢か

竹原市 森 井 菁 居

かかる時みんな独りなのに気づき
許す氣にさせたグラスを空け終る

言い勝って優越感と虚しさ
吟味して一桁安いエメラルド

大阪府 小 谷 葉 子

観賞の花 蜜蜂を寄せつけず

鷺羽山（三句）

磯の香を活字に入りたい鷺羽山
過去ひとつ断ち鷺羽の旅終る
傷心の影うちくどく瀬戸の海

守口市 岸 本 豊 平 次

てにをはに耳をすまして遺言状

家中をするめ匂わせ一人のむ
散りたくもなろう造花の春の宵

大阪府 江 城 功 雄

鴻毛の軽さいのちの墓洗う

脊を向けたその日からの道避け
恋しても愛なき黒と白の距離

岐阜市 市 川 鱗 魚

キッスならいい吊り皮の好角度
青すだれ女きれいに昼ねする
郷土出身スターの家が見当らず

米子市 林

瑞 枝

式終えて抹茶でくつろぐ裾模様
ポーナスは一等寝台で祖母を呼び
苦学する男の意地に娘が魅かれ

倉敷市 藤

井 春 日

底辺にあえぎ夢など追うとれず
ポーナスの不満ホステス聞いてやり
仲裁はドスの効いてる河内弁

島根県 小

砂 白 汀

故郷の風あたたかしソバの花
骨のない男重宝がられもし
色褪せしカンナよ人妻となりしが

島根県 堀

江 正 朗

むずかしいひとだと女房殿が言い
あきらめておれば阿呆にも見えんかな
何もしてやれぬに父親らしい顔

島根県 堀

江 芳 子

われ女おろかな見栄と知りつつも
甥ぼしだ姪だと財布いそがしい

これ以上触れては欲しくない対話

広島県 南 条 露 声

この顔を海水浴と訊かれたり
ぎりぎりの線までまくる潮干狩り
一日の膳に栓抜き添えてあり

東大阪市 竹 中 綾 女

またたいて流燈は行く早くおそく
幻想を誘う流燈渦を巻く
流燈の一つもえつき姿消す

東大阪市 竹 中 肖 二

幾千の流燈静かに巾揚げ
よるべなき葡萄の蔓の端ゆれる
冷房の効いたあたりを客は選り

新潟県 高 野 不 二

郵便番号世はむつかしくなるばかり
隣の嫁のアラ迄数えたて
値切るだけ値切り隣とまだくらべ

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

年寄りの浮かれる日なり年金日
郊外は詩なり緑をたべる牛
くされ縁と両方がそう思い

和歌山県 ふ き あ げ 虎 城

通過駅ことさら速度あげたよう
道具ではないと女房すねている
友情を越えそうなのに釘をうち

羽昨市 三宅ろ亭

四国、中国へ(台風四号前)

大歩危と小歩危が競そう石の列
桂浜竜馬目をむく懐ろ手
坊ちゃんにならって手拭腰にさげ

七尾市 松高秀峰

幹事を引き受け自腹の破目となり
見送りの意地はとうとう振り向かず
馴れてますラッシュアワーに下積みに

岡山県 目賀芳月

満ち足りた顔朝顔の数をよみ
カーテンの色だけ違っている団地
満天の星クーラを羨やまず

大阪市 岡本まさひろ

山頂よりまだ高いのは秋の雲
人間の住むところ空へ空へのび
夏姿 女 女の性(さが)を見せ

出雲市 板垣草丘

こんにちは隠れ場もない家に住み

テレビ見る男の顔に策はなし
階級が変らず明治百年祝う

羽曳野市 樋口一峯

美人とは別に看護婦の行届き
尼僧とて所詮女の身のこなし
用事言い付ければ順に下へ云い

鳥取県 近藤秋星

無情とは飛べない蟬にして放し
炎天の蟻の心をころとし
蚊取器の夜っぴてうなるのも哀し

鳥取県 谷無閑

年輪が最後をうまくしめくくり
割勘は一級家では二級飲み
救急車啞者の夫をフト思い

鳥根県 志賀美栄

肩のこり五十の齢をかみしめる
北極星宇宙の果の栄光よ
忍従の母の姿を愛と言う

泉佐野市 大工チヨ

娘のお産替ってやりたい気の焦り
飲めぬようになって中元もてあまし
準備万端台風はよけて行き

島根県 榊 原 加 代

淡々と墨すらんかな孤独よし

コロットとは何んと便利な忘れ方
無精者花火の音をきいただけ

齒車の狂い暑さのせいにする

西宮市 加 納 行 雲

注目は覚悟それ程和服好き

大阪市 堀 口 欣 一

口紅の色に合せた服の色

科学装置心のゆるみ止められず
子に追われ夫に追われ銀婚の口
つましくも二十五年の今日も納豆

女あり東京からの長電話

大阪市 中 沢 風 太 郎

夕立の団地の端しは降っていず

大阪市 河 内 屋 源 七

閑人が寄って防犯モデル地区

みだらなる女心にある魅力
おとなしいだけが取り柄の女なり
古里に向こうて汽車は遅うなり

再会を約し前科者同士

松江市 村 松 醉 歩

まだ人情が遺ってるバタ屋と立話し

鳥取市 有 田 鹿 子

耳よせてそつと寝息を確かめる

長生きの幸せ選ばれて橋渡る
ビフテキのかたき家内を責められず
日赤に常陸宮華子妃を迎え

生き残る金魚のんきによく太り

華子妃のハンドバッグも値ぶみする

ああこれが我が人生と言うものか

羽曳野市 榎 本 吐 来

米子市 八 木 千 代

再会の姿に愛の距離を知り

覚悟した台風外れて物足りず
退院を待つカレンダーとはなりぬ
L寸へ昔のサイズつけ加え

再会の女いくさのかげを負い

八尾市 宮 西 弥 生

かあさんに似た娘選ぶと言うてくれ

大阪市 河 原 林 比 呂 路

この辺で素直になるにまだ小言

一泊の旅へ海見え山も見え
ワインの味恋しのびよる夜のしじま

大阪市 梅園摩耶

バラ燃ゆる虚栄を吾と分け合つて
手鏡へふと邪心ののぞく日よ

河内長野市 森本黒天子

若い血をたぎらせたのかと見る寝顔
孫成人対等でさす将棋盤

広島県 高橋鬼焼

蚊をたたく音にも女気をつかい
似たようなうれしさのこして夜を稼ぐ

姫路市 大久保大夢子

街路樹の一本欠けてバスのりば
向日葵の花より低いマイホーム

大洲市 堀内曉風

うかつにも即答をして残る悔い
公園のベンチデイトも蚊に喰われ

尼崎市 中谷利美

かかる世に戦陣訓のような社は
一徹が火中の栗を拾う破目

大田市 藤田軒太楼

好きなのに嫌いという仕草 女
横顔が意識し合つてる倦怠期

大阪市 藤田頂留子

室生寺月参り(二句)

写生するひとみも清し五重の塔
靈山に都塵を洗う深呼吸

大阪市 奥川継之助

大粒の汗天職を守り抜き
大ジョッキおかわり不貞の話きく

鳥取県 中川定人

おふくろのような姑になりたい気
約束の海をまだ子は忘れない

諫早市 原田明春

かくし芸出して前歴みなに知れ
流会になって良かった反対派

大阪市 有信吐痴男

セコンドも秒といえは気忙しい
朝顔の種だったのかとパジャマの子

八尾市 高杉千歩

幸福を逃した朝も化粧する
海山に一泊も組み墓参り

和歌山市 増田志津穂

姑と嫁美しいうそですそれでよし
エチケツト本当の心は別にある

和歌山市 増田次章

ご破算がゼロにはならぬこともあり
あきらめたとたんに運がむいてきた

羽曳野市 前 川 桂 馬

褒められて先生の句と言いそびれ
金一升と知らず雑草生え茂り

竹原市 生 信 笑 子

こけしコケシお前に恋を聞かせよう
化粧してみても大人と見てくれず

河内長野市 井 上 喜 醉

名文句借りた挨拶すぐ終り
旅先のアリバイコケシは知らん顔

大阪市 加 納 楽 々

雲の峯何と小さきわが悩み
伊勢安楽島に遊ぶ

うに なまこ 獲れて遊泳そっちのけ

宿毛市 瀬 田 美 知

対象をなくしてからの瞳のかわき
孤独を楽しんではまずとは負けおしみ

愛媛県 磴 本 満 子

ハイミスの信念お金を貯めること

愛情と別につきつぎ子は生れ

堺市 斎 藤 亜 也

大学の机は今日もバリケード
合槌はうつが一度聞いた話

和歌山市 かりや みさを

子の寝相直し蚊遣の場所を替え
はかどらぬ内職蚊遣だけがたち

鳥取県 川 崎 秋 女

水郷と言われ水禍に見舞われる
大物か小物か児の寝顔

京都府 福 村 飛 龍

すり硝子影をうつした風呂上り
マージャンのカモになるのが先に来る

尼崎市 平 井 露 芳

今だから話すと故人の噂なり
働かざる日曜二食でことが足り

堺市 細 川 暁 年

ジェット機と新幹線で稼ぐタフ
銭湯で意外な噂もって出る

竹原市 時 広 一 路

人間とゆう宿命に今日も生き
申し訳なさそうにいる雲一つ

八尾市 香 川 醉 々

生き堪えてなお生き抜いて瞳が語る

口よりも眼で叱られたこたえよう

大阪市 田 中 多 幸

地価ブーム待つ思惑がゴミ捨場

初給料ビヤガーデンの泡になり

新居浜市 村 上 水 軍

倍買える金を使った釣り疲れ

都々逸が不要の若い席で酔い

島根県 吉 沢 山 我

先代の羽振りが生きる庭の松

愛人へ手をさしのべて川を飛び

鳥取市 谷 尾 透 風

成功も出来ずに成功の鍵を説き

仏心があるからと釣れない事にする

鳥取市 河 口 忠 志

血のめぐり悪い自分を認め出し

ゆずり合い円満保つ義理の仲

鳥取市 藤 本 和 宏

大ぼらを吐くだけ吐いてサツと去に

水中の金魚さぞかし涼しかろ

米子市 源 氏 勝 久

自己本位そんな子の顔ただ見詰め

三日前の新婚さんともう見えず

鳥取市 藤 本 鎮 也

白衣今しどろもどろの嘘を言い

故郷の蚊でもやっぱり痒ゆおすえ

鳥取市 藤 本 恵 子

父ちゃんの席が空いててすわって見

白壁にもたれて留守の母を待つ

豊岡市 不 二 本 和 久

信じ切る児の瞳約束破るまい

口髭が生えたに母がまだ叱り

京都市 藤 本 征 山

名園の石成程という構え

女ある日全部あげたい瞳が濡れる

鳥取市 藤 本 佳 女

岩清水くんで憩わす切り通し

迷信とけなしておいて気にかかり

香川県 西 山 綾 子

小利口になるなちつと阿呆でよし

肝臓の修理唯今ドック入り

出雲市 竹 内 李 朋

花活けし花の生命の中に住み

寝転べば子もねころんで笑い合い

松原市 守 屋 万 竿

あつさりと折れてますねとレントゲン
鬼ごっこ松葉杖の子も混じり

竹原市 出 島 静 波

身に負担かけて趣味とも思われず
日曜大工に曲って錆びた釘

羽曳野市 麻 野 幽 玄

打水と蚊遣り明治は故郷に生き
群衆の中に居て尚増す孤独

普通寺市 伊 藤 歌 子

祝金婚式

五十年永い旅路をよりそうて
九官鳥今日から家族の仲間入り

高槻市 山 田 ス ミ 子

大掃除タンスの位置を変えただけ
日焼けした顔が自慢の夏休み

八幡浜市 別 宮 す き

蚊のような声した頃もあった妻
忘れた人アルバムに笑ってる

大阪市 島 野 県 吉 郎

ローカル線最後を走る汽車磨く

泉佐野市 大 工 静 子

週末はいねわりしても起きて居る

大阪文化祭第20回川柳大会

日 時 昭和34年11月23日(祝)

11時開場午後0時半開会

会 場 中央公会堂(3階集會室)

講 演 郷土史家 鷺谷 櫻 風 氏

兼 題 「読書」 岡 橋 宣 介選

「公会堂」 川 村 好 郎選

「新聞」 片 山 雲 雀選

「あいさつ」 古 下 俊 作選

「文案」 堀 口 堧 人選

席 題 当日2題発表(正午しめきり)

投 句 各題ごとにハガキ1枚に2句ずつ

締 切 住所・郵便番号・氏名・雅号を明記

宛 先 11月10日着限

賞 530 北区中之島1大阪市教育委員会内

句 集 席題・兼題共優秀句に、府知事・大阪

主 催 市長・大阪府・市教育委員長から贈呈

一〇〇円別送してください

大阪府・大阪市・大阪府教育委員会

大阪市教育委員会

添削をしてまでも

山添眉水

句会でよく句を直す、つまり添削をされる選者があるが、ある川柳会のK氏は特にひどいようである。普通の小集句会であるにも拘らず「今日は研究会のことだから句を直してみた」といって集句の大半を添削されていたが、披露を聞いていると別に直さなくてもよいと思われるようなのが度々出てくるのであった。勿論私の句も他のベテランの句も直されているが、中にはひどい直し方の句がある。私が「それでは作者の句か選者の句になるのか判らないではないか」と再三抗議したものである。ところがこのK氏は根からの川柳人でないためか、または性格によるのか作句されても老人特有のひねくれた句風のせいか、添削された句もどうも低調になってしまう場合が多いようである。

私のつまらぬ句を引合いに出して気が引けるが、一例を挙げると

女性にも可愛られます小ジョッキを
女にも可愛がられているジョッキと、
直されたので、それでは古いから直してもら
わなくてもよいという「眉水は句を直され

ると怒る」と他の句会の席上でいい触らしているとか。K氏のいうように、単に句をいられたからといって私は文句をいうのではない。その添削方が正しければ却って私は自分の拙い作品を恥じるものである。例えば去る七月七日の麻生路郎氏の三回忌句会で兼題「子」を菊沢小松園氏が選をされたが、私の句の

迷い子は口いっぱいの顔で泣き
迷い子は顔いっぱいの口で泣き
のがよいのではないかといわれたので、私は即座に謝したものであった。

次に七月十九日の番傘系のある小集、小集といつても番傘本社句会の出席者数と交らない実に七十四名という集りであったが、その宿題「芝居」で私の大した句でもないが、

風邪熱の子役に弱るドサ回り
知恵熱の子役に弱るドサ回り

と直されたのであるが、この選者は番傘でも大幹部の方であり夕刊新聞の川柳欄では百科事典めいた解説をしておられる博学の方らしいが、大体この選者は知恵熱は何才位のこどもに出るのかご存じないと見受けられたのである。私の経験では知恵熱は主として乳児から幼児となるいわゆる知恵の付く年ごろに多く発する病気と思うのだが、乳幼児が故障であれば人形の代役で一時を凌ぐことも出来るが、私が句にしたのはセリフの一つもいえる年ごろのこどもを素材にしたのであって、同じこどもであっても選者の知恵熱のこどもとは年令的に少し差があるのである。出席者の中には知恵熱も風邪熱も大した違いはないのだから

素直に呼名すればよいと思われるかも知れないが、私は脇取りの数度の読上げに対して黙っていたが、隣りの堺谷伊升氏にあれば私の句だが承服出来ないから名乗らないといったところ、伊升氏はそれなら代って名乗ってやろうかといったのを制してその句を没にして下さいと叫んだものであった。このような不必要な添削に際して、選者に妥協してまでも入選をたくはないのである。

私が番傘で兼題の選者としていた頃は、水府先生から選についてイヤな事もいわれ、また選についてのいろいろの話も聞かされてきたものだが、どうも今の人達は上に偉い人がいないせいかわ物ごとに対しての考えが甘いようにも思えるが、これは人ごとではない私も死ぬまでが勉強をせねばならないと思うし、先輩の文久氏から自分の句は大切にせよ、だから安易な気度で句を作るなと訓えられたことが胸の中にあるせいかも知れない。だから初心者を指導する場合の外は不必要な添削をせずに、むしろそのような直してまでも抜いてやろうといった親心も時によつては己れを笑うものへと陥し入れかねないことにもなるだろう。心したいことではある。

直原玉青著

創元社出版
価 二千円

「新しい南画と

俳画の描き方」

本社でも取次ぎいたします。

死の川の追憶

東野大八

「大粒の雨を吸い込む瓦屋根——ありがたい今夜は涼しいぞ」

書齋の窓ガラスを大きくあけ放って、川柳入りでひとり言しながら、私は軒端の空をうかがった。この二階からは木曾川の清流が一眼で、今も携帯マイクの美濃加茂音頭をのせて、ライン下りの舟が二つ、三つ。やがて雨は、水しぶきの雨足を次第におしひろげて、しだいにそうした風景を黒ずんだ暮色に閉じこめはじめた。こうして、週末土曜日の、単調な一日は夜に入っていったわけだが、それからものの五時間後に、有史以来のもの、バス二台の転落事故が突発し、濁流は車もろとも百四人の生命をのんでしまったのである。現場は、のびやかなライン下りのあのメロディを乗せて流れる木曾川の、幾曲りかの上流にある飛驒川という山峡なのである。私は朝五時起床が日課なので、ほとんど宵

寝主義だが、この日はかりはそうもいかなかった。遠雷のとどろきをのせた雨は、次第に豪雨と変じ、雷鳴はすさまじい閃光をともなうて息をもつかせなくなってくる。この十年間、これほどの烈しい雷鳴を体験したことはない。パチパチと電光はあたりに音たててはじけとび、片ときも間をおかず、雷鳴は鳴りに鳴りつづけて、家を真二つにするほどの落雷が相つく。

こんな具合なので女房、小供は一かたまりになって部屋の間でフトンをかぶって死んだようだ。私は、サントリーの角びんをひとしとにぎりしめて、表座敷のどまん中にどっかと坐り、酒をあふっては狂乱怒濤の外部の騒音に挑むが如くあたりをねめ回す。とつくに停電してはいるのだが、間断なきマグネシウム性の強光な電光で、毛筋一本までがくつきりと明るい。明滅する電火と、滝のようなト

ユをたたき落さんばかりの水勢の中に、私はいつか、洛河支流の洛寧の夏草の底に立っていた。頭に鉄帽、手に歩兵銃がある。

「掌櫃、この水は人喰い河だよ」

渡っちゃいけない、そういつているのは王バフンだ。方城からいつかついてきている中国人で、いつか私の無二の相棒になっている。王とい字に馬がついているところから、馬のフンをもじって私の身辺では、さきの名前で通っている。齢は三十前後、カマキリの三角面の人相はよくないが気のいい男、しかも地理に明るく、洛陽辺の土と風が此奴の、青黒い皮肌にびったりと喰いついていいるようなところがある。

「舟を集める、ハンランしない間に渡河だ」

性急で気の短い隊長の怒声に、われわれはかくして十数隻の老朽した釣り舟で濁流に挑んだことである。五、六人がやつとのところに倍以上の重装備の兵が詰め込れる。

——このとき三十人もの兵隊が死んだ。そして、コマメな私の自分、王馬フンも溺死した。舟が不足で危く岸辺に残った私や、戦友はその厄に遭わずにすんだが、私は今も重い軽機や鄭弾筒を背にした仲間が、濁流にみえかくれして、アッというまもない光景がまざまざとマブタにある。

——可愛想な、あいつら

私はまた改めて酒をあふりながら頭の上の時計を見上げた。一瞬の電光に、針は午前十時半を指していた。八月十八日未明、惨事はこのときすでに起っていたのだ。

十八日の日曜日朝、雷鳴と雨がウソのように消え失せた九時ごろ、私ははじめて、飛騨川のパス遭難を知らされた。それは、私のつい鼻先の畑まで、丸く中天にふくれ上るようになった木曽川の凄じい濁流のごう音の中であつた。

私は早速、近くの加茂警察署に出かけた。署内はすでに日刊紙や放送関係者の取材班でごった返していた。

「現場で六年前、乗用車が落ちて三人水死した。死体が上がったのは七十目だったよ。飛騨も木曽川も、御岳の岩清水などを集めた冷たい水でね、ホトケ様はなかなか浮かないんだよ」

その理由をきく若い記者がいる。腐るのが遅いからだ。水がぬくいとホトケはすぐ浮く、ガスが充滿するからだ。現場は、飛騨の山波の棧道で、まるで三升釜のつち金みたいな形で、山くずれにあっても、山水に打たれても忽ち山肌同然になつてしまふ。むかしは、ここは馬の背中みたいな未舗装の一車線で、これが県道四十一号線だ、とあてこすりの写真

記事を扱ったこともあるところだ。

むかしとったキネヅカで、そんなことを取材班の中に行っている、むかしの後輩や、サツの幹部連、消防隊員に説明してやる。

その日に死体は十幾つ上った。数が多い上、ダムの水流にひっかかり回されて、つい浮上したものらしい。死体は、男はズボンだけ、女は例外なく素裸だった。そして、身体中はナマスのようなうだ。如何に水勢が激しいものかわかる。

十八日の夕方、私は観光会館の回向の席に連つてめい目していた。松板の紙も張らない寝棺の山に、白、黄の供花の菊の花が傷々しくも鮮やかだ。

おえつ、号泣、そして時折のもの狂わしい絶叫。史上第二番目の集中豪雨のすさまじさと、湿舌という二十一年に一度か二度といわれる巨大な雷雲の襲来、その中に、ヒ弱な棧道の国道は、山の一角と化すまでに石塊の急斜面の底に埋没、二台の観光バスはその水と石にはじきとばされ水中に消え失せたのである。読経しながら私は洛河の戦友をホウフツとして思いうかべ、平和はいいな、読経と花と香煙がある——そして、これは今、涙を流してここにいる。

お買物は 明るく楽しい
ハンシンへ！



大阪梅田 水曜定休 電大原 361 1201(代)

阪神

かあちゃんと、コドモと、老人と、人懐っこいそうした呼称のホトケ様はそれから毎日のように私の家を走り来り、そして運ばれていった。降るような蟬時雨と、絶えることのないヘルの轟音の中を、十九日朝、通勤バスの中は、こんな話もしていた。

「死体安置所の中をみて、はじめてベトナムの悲劇がわかったよ」

戦争と平和か、私は窓からまだ濁っている木曽川を眺めに入つた。平然と黄色くその川は今日も流れている。

(八一—一九)

秀句鑑賞

—前月号から—

後藤 梅志

マイカーを手放し顔にゆとりが出

(花村)

マイカー族のサービス範囲はひろまる一方で、遂に九州へ巨大なフェリー船が、カーを乗せたまま通うことになった。安サラーマンにはついてゆけないので、ポツポツカーを手放すものが出来た。これは当然至極。

この句は「顔にゆとりが出」とはつきり指摘しているが、それは自分のことか、他人の顔のことか、判断しない。しかし自分のことであることは、想像がちがって来た。スタミナを消耗するのが夥だしい。思い切らざるを得ないのである。こうした段階がよくうけとれ、かるい笑いを催す。よく纏った句だ。

もしわてが死んだらもらいはるやろな

(日満)

「あんたもらいはるやろな、わてが死んだら」

「そら、時と場合によるがな」
「ソレ、どういう意味だんネ」

「今日、明日でもこまるやんか」

「分かりましたハイ精々長生きしましょ」
「うっかり冗談もいえないのである。女の執念というものは、自分の死んだあとまで、注文をつけようとする。恐ろしい気もするが、これも愛の囁やきとれぬこともない。」

しかし、頭が禿げかけて来たのに、女房に妬かれる気持は複雑だ。どれ少し旅にでも出ようか。

人喰ったポスター悠々御当選

(緑之助)

これは、今東光和尚のポスターと思われる。大口を開いて、ワッハハハと笑って見せたポスターは異色だった。こんどの参院選ほど、投票に情熱をもやした投票はなかった。

今東光という人は、名代の毒舌家だが、仲々愛嬌があって人を外らさない。例えば、「ヤアどうだ諸君。俺にこれだけしやべらしとして、俺に投票しないヤツは「馬鹿か、間ぬけか、ドロボーだぞう」

こんなことを平気という。チャンと、人を捉えて離さないところ、実戦家だ。

がさて、どんなことをしてくれるやら。

昆虫の恋は喰われて死んで行き

(いわを)

凄惨な気もするが、昆虫の世界は、みなこんなものではないだろうか。コオロギや鈴虫は啼きだけ啼けば、脚の方から雌に喰われてしまうし、カマキリは完全に雌の餌食にされ

る。どうも雌の方が、種族保存上優位だ。

さて、人間はどうかというに、これもメスが優位で、女の方が人数もふえ、老来益々かんだ。男は結局、餌さを運ぶ役になっている現状で、なさけない有様だ。

この頃、女性の脚が遅しく、達者になっていくのを見るにつけ、その感を深うする。この句も、その辺から発想していそうだ。

ヒト科にも牝はひっかく癖があり

(紅雨)

女性をぶじくしたような句だが、「ヒト科」としたところに軽いユーモアが湧く。

元来、ひっかくのは女性の武器で、腕のほそい者には、これしかない。いつの間にかひっかくのである。夫婦喧嘩の仲裁をして分るが、男はたいていどこかをひっつかれてい

る。早いとこやるんだと、感心する。
ヒョウとか、猫とか、毛並の美しい動物ほど、その動作が早くて、たくましいのも、おもしろい自然界の現象だ。

ゆきずりに傘さしかけて恋めける

(酔夢)

きれいな句である。

俄か雨に、単に見知りごしの人だが見捨てもならず、傘をさしかける破目になった。こうして相々傘になさなくても、年はちがうし気がとがめることはないのだが、相手が小さいさくなつて行くのへ、雫が落ちないようにするには寄り添わねばならず、少し気がひける。男も無言。こっちも無言なのが、きこなくなし

て、ままよ見つかればそれまでと大胆にする
こういう状況を想像した。俄か雨は、いた
ずら者なのである。

見劣りのする犬と会う散歩道(秋月)

犬を飼うのはいいが、どうも散歩に連れて
行くのが厄介で、とよく聞くがそのせいか、
女の子が連れて出たりする。中には大きな犬
もあり、太い鎖りをじやらつかせているが、
犬の方がちからが強く、はらはらする。

この句の「見劣りのする」は、自分の連れ
ている犬の方が、とりたい。相手の犬の方
が立派だったのである。少し羨ましい気がし
た。それだけのことだが、この体験のある人
なら、一寸したユーモアと、何かを感じとる
であろう。飼主の心理は微妙に働らくから。

悶えてる女のように緋鯉潑ね(無聖)

この句は、少し造り過ぎのように思えてい
たが、段々「鯉」の習性を知るに及んで、こ
うしたことも、まれにあることが判ってきた。作
者は緋鯉の潑ねるところを見たのであろう。
鯉は、池の水が流動する所へ来ると潑ね、目
覚しい跳躍をする。全身をくねらせて、身悶
えするかと思うような動作をとる。意外な場
所で跳躍するから、見る人もすくない。

緋鯉は「鯉の変種」で従って、メス、オス
ともにある。よってこの句は、絶妙な描写を
したことになる。参考になった。

生ぬるき手に探ぐられてゆく鼓動

(美巳代)

乙女が男に手を預けるには、決意がいる。
信じ切ってる男であっても、乙女の感觸は、
生ぬるいと感じるのが先きに立ち、急に臆
病になるのである。温くとい掌を握っている男
は、油断がならない。というが、それはどう
か分らない。昔の仲居さんの話である。

この句は、一見きわどいところを描写して
いるが、何でも正直にいうがよい。見る人
の方で、判断してくれる。余り美化したり、造
り過ぎたりしては、却って厭味になる。本
当のこのことを述べて判かってもらうのが肝腎だ。

ふみ台になる倅の重み知る(正朗)

作者が戦冒の方とは、皆さんご承知。夫妻
とも川柳を友としておられる。作句はすべて
心眼に映つるものを適確にとらえている。

この句の「踏み台」は、抽象的に、借用し
たいわば形の無い踏み台だが、実在するふみ
台も、作者にふさわしいものだ。昔の人の考
案した踏み台は、腰掛けにもなり、紙屑入れ
にもなっていて、無駄がない。わが家の踏み
台は、亡母の時代からあり、家宝ものだ。作
者が自ら踏み台になる喜びをたたえる気持
は、よく分かるのである。

結論から先に言うがという闘志

(村諷子)

議論をするのに、結論から先きにキリ出す
のは、勝算あつての場合である。どうしても
屈服させようとするときは、それしかない。
この句は「闘志」がよく出ていると思った。

句には「勢い」というものがあつて、句を生

かしてゆくのである。この句も、何事とは知
らず好感がもてるのは、作句に意気込みがあ
るからであろう。これも作句経験による。

スカートを母も短かくして歩き

(文子)

一読して、句にも、作者にも引かれた。実
に軽いタッチで、要領よく纏っている。お母
さんも進歩的で、周囲の時勢と不調和になら
ないように、気を配っているあとが見え、二
人の軽い歩調が手にとるように分かる。
垢かぬけのした句と、評する外はない。

責任を逃れる時のうまが合い(静波)

近作の、二句組にもこのような句があるの
が嬉しくなる。この句は、上の句の五七と、
下五のうまが合いが、うまくピッタリ合った
作者は、まだ若い茶目気のありそうな、青
年だらう。この句は、処世上少しもプラスに
なる句ではないのだが、川柳味という点では
急所を掴んだ、シャレタ批判句である。

石原沙人・青竜刀著

諷詩龍

沙吟

堂々 三八四頁
頒価一、〇〇〇円

この本を亡賢妻佐代子のみたまにそなえる

前説―これは遺書のもりである。だから

誰にも序もバツも頼まなかった、とある。

発行所 東京都大田区西蒲田6-17-12

三 元 社

(振替東京一七六・五九一番)

初歩教室

題 「月」

菊沢小松園

月まるし心のゆとり論すること

お月さまほめて別れる立話

臘月別れたくない影法師

人間の希望月まで手がとどき

臘月だけ知っていた手の温み

①スケールの大きなよい句だ、月の丸さを

して自戒の師と仰ぎ見るところなど女の方の句として得がたい緊かりしたものを感ずる。

②夜である立話の別れ際に月を褒めてではお寝みなさいというところ世智にたけた女性と見る、句の繊細な叙法、引きしまった句がよい

③臘月が中七の内容によくマッチした、表現に苦心のあとが見えるのもよい、仄かな情感も気品があって佳句に属する。

④ロケット時代を暗い気持で見る人も多いが、この句は明るい見方をしているのがほほ笑ましい。人間の希望の果として無限を楽しんでいられるのを、句の上に窺えるのも喜しい。

⑤誰も気が

付かぬ二人の仲をその夜の臘月だけが知っていた、下五の用語に句の生命があり力点がある頂ける句だともおう。

冷房のよく利く部屋をのぞく月 静観堂
名月にすねてるように地下で飲み 吐痴男
世界一周何処で見るのも同じ月 静子
そっと置いて置いて上げた月 白汀
紅つけた萩がつめた月を撫で 同

①夏を涼しく冷房の利いた生活へも昔ながらの月影はよき点抽であろう。年配の人の重厚さも窺える。

②月への感傷さもなく酒に親んで徹底した自己奉仕の生活には、月を仰ぐ心の裕りは無い、地下の酒場も地上もこの人種には問題ではない。しかしこの人達もここに到るまでの道程における人生行路を想う時に、すべては肯定されるのであろう。確かに一面は突いている句。

③実際さうであつてもこつもずばりと見せられては想像の句の域を脱せない、所詮漫画の世界のようにも思われる。

④これも同じことがいえる。綺麗ごとだけの句には一寸引かれることはあつても味は少ない。

⑤目的に遠い疲れた足どりでぼんやり見上げた、そこに美しい月があつた不如意な住み難い人生を哀むように、この人もほつと洩息を吐いてそれから好い思案も出るとだろ。

⑥目的に遠い疲れた足どりでぼんやり見上げた、そこに美しい月があつた不如意な住み難い人生を哀むように、この人もほつと洩息を吐いてそれから好い思案も出るとだろ。

⑦目的に遠い疲れた足どりでぼんやり見上げた、そこに美しい月があつた不如意な住み難い人生を哀むように、この人もほつと洩息を吐いてそれから好い思案も出るとだろ。

⑧目的に遠い疲れた足どりでぼんやり見上げた、そこに美しい月があつた不如意な住み難い人生を哀むように、この人もほつと洩息を吐いてそれから好い思案も出るとだろ。

⑨目的に遠い疲れた足どりでぼんやり見上げた、そこに美しい月があつた不如意な住み難い人生を哀むように、この人もほつと洩息を吐いてそれから好い思案も出るとだろ。

⑩目的に遠い疲れた足どりでぼんやり見上げた、そこに美しい月があつた不如意な住み難い人生を哀むように、この人もほつと洩息を吐いてそれから好い思案も出るとだろ。

⑪目的に遠い疲れた足どりでぼんやり見上げた、そこに美しい月があつた不如意な住み難い人生を哀むように、この人もほつと洩息を吐いてそれから好い思案も出るとだろ。

色紙短冊
書画用品

大月夜

丹生堂

を申せしむ

病窓の孤独を月に覗かれる 吐 来

テレビには勝てず名月にただひとり すき

飯場の月出稼の日おしえられ 同

振りむかぬ二人は月に送られる 初 甫

大文字犬に見えそう月が寄り 同

①病人の独居ほど孤独感の深いものはないだろう、そこを青白い月が差込んでいるなど想像だけでも憂鬱だ、それだけに深さはあっても如何にも暗い灰色の人生であつてもそこに微かでも前向きに明るさのある句がほしい

③近頃の若い人達の読書力の落ちたのもテレビの影響だといわれている、その皮肉か名月にさえ見ぬ人もない下らぬテレビに見返えされたというのである、深刻さもあり面白い句になった。

③飯場から月を見上げる、地位に差はあつても配所の道真の心境か、この月が丸くなつたらもう出稼ぎに来てから何か月、子供も大ぶん大きくなつただろうなあ妻はノ余情のあるよい句。

④振り向きもせず帰つて行った二人、見送っているのは母親か月に心を委して親心を詠っている。

⑤これは京の大文字の送り火に月が上つて犬の字になつたというのであるが、余りに技巧が過ぎて上手の手から水が洩れた感じ、無理な句になつては遺憾。

イメージをカメラが壊す月の裏 利 美
すれちがうアベック月のあかるすぎ 葵 水

内職の母の手許へ月がさし 秋 女

転任地ここにも丸い月が出る 虎 城

①前掲白汀さんの句と同巧、前のは月的心になつて創られ、これは地球の側の人間とし

若本多久志句集 老いの坂

ての現実感から出ている、何れも月の裏の句月もいよいよ表より裏側の時代になった。②月の光りがアベックへ気の毒なほど明るいのだがあくまで人間が今より床しかった頃の人の同情的な思いやりで、今の若い人達には遙かに遠い思想ではないだろうか、白昼堂々、まだ海のものとも山のものとも判らぬ仲でも腕を組んで歩いている者に取つて月の光りを憚る優しいさがあるだろうか。

③内職の手許に月の光が差す美しい画のような景であつても月を賞でる時間的な余裕の無い人々に取つては最も深刻な生活の句である、月の光りで少しでも仕事の効果の上ることを望んでいることだろう。

④馴染のない不安な転任地四辺の暖かい人情に迎えられる、ここにも同じように円満な月がほつとして見上げる空に微笑している、心の和ごむ句。

月の裏そこも涙の満てる世ぞ 選者旧作

月の暈女四十の泣きほくる 選者吟

月という悠大なものに圧倒されたか但し、暑さの体の調子か総体に低調のようす、目標

が大きければ大きい程なるべく具体化させなければ焦点がぼける、掴み処のない句になり勝ちです、残暑も暫らく秋ともなれば作句精進し楽しい時になりましょう健吟を待ちましよう。

八月二十日締切題「月」 十月号発表

九月二十日締切題「流れ星」十一月号発表

十月二十日締切題「言葉」十二月号発表

宛 先

大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号

菊 沢 小 松 園

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本 社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守 口 市 京 阪 本 通 2-18

三洋電機株式会社内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

プラン

舟木与根一選

新家庭あまいプランにミスだらけ
寄付あてのプランだんぢぢこまり
骨抜きにされプランは見送られ
子がついて来ゝプランをぶちこ
新婚のプラン当分産みません
倒産のプラン復心さえ知らず
連休へ親のプランと子のプラン
計画に入れてなかつた子の頭脳
クーラーを背に冬山のプラン練る
六感がプランの盲点つきとめる
蜜月の旅のプランは詰まりすぎ
エビ鯛のプラン相手が乗ってこず
児のプラン照る照る坊主ぶら下り
プランまだ夫婦になるとこへ
プランにはなかつた筈の雨の駅
留守番を夫に頼むプラン立て
出張のかばん水着も入れて行く
けいかくがもれて地代がもう上り
親馬鹿の方がプランに熱をあげ
男だけ夜のプランを別にもち
鈍行のプラン皆から嫌がられ
雨の日のプランも幹事立てておき
折角のプラン野分けがもっていき

双葉 軒太 代仕 礎山 芳子 春日 曉明 公輔 庸佑 十九平 古心 柳男 吐痴男 不子 和二 和久 古方 素身郎 ろ亭 七面山 秋女

プランには組まぬ時間を秘書知り
子と妻のプランミックスして旅行
重役に好かれるプラン作り慣れ
子供らのプランに動き疲れた日
当然の死亡にプラン立つとらず
子のプラン齡を氣にして組んで
プランとつくに下山してる事故
プランでは二人と決めた子が出来
石橋を叩きプランを萎縮させ
プランには無かつた羽目に二人
ベトナムとアメリカのプラン崩れ
虹架けるプラン地につく共稼ぎ
旅行プラン立てアルバイトも初め
家建てるプランがあつて氣がめ
招かざる客へプランがあつて出し
団体のプラン車中で泊らされ
子の数もプランに入れて新家庭
青春のプラン病床から崩れ
住
ホステスのプランどおりに操られ
愛の果はまだ調節をするプラン
甘くみたプラン生死の境で悔い
ちぐはぐのプランめでたい子沢山
限りある命プランへぶつつける
人
松葉杖のテンポを知つてゐるプラン
地
幸せはプラン通りの運をもち
天
母の日のプランへ父も入れて組み
軸
好生 秋月 醉々 正朗 豊波 藤平 頂留 曉風 章雅 露声 涼人 千翁 弘女 綾朗 史朗 梁水 旭峯 七面山 宵聖 無明 千翁 白汀 惠二朗 魚山 鶴丸

役付き

小畑自有浪選

定年のプランは子供抜きで立て

下積みの役へ学歴我慢させ
役付きへ落度が重くのしかかり
役付きになる金汚職でひねり出し
役付けてどんどん仕事させる肚
役付けて出させる肚へ腹を据え
役付きという貫録で話しかけ
役付きの初日は椅子に浅くかけ
合併の当初お義理の役もあり
役付きも人間居眠ることもあり
係長になつたを子供ふれ歩き
二三日まだ役付きの顔でなし
役付きの息子も親には頼り無し
役名を呼ばれ自分と氣が付かず
社宅にも役付き格が移植され
労組で働きすぎて役付かず
停年へ言訳だけの役が付かず
お人好し金にはならぬ役ばかり
役職になってネクタイしめ直し
ままごとへ勿体ぶつた父の役
職場では子が役付きと云う立場
役付きになって仕事の鬼となり
家一步出れば課長の顔になり
役付きと聞いてお見合する返事

忠志 勝久 無閑 曉明 みのる 庸佑 まさひろ 雅城 七面山 勝子 涼人 綾女 省二 章雅 十九平 古心 梁水 幽谷 透風 佳女 礎山 春日

役付きも平も同じ団地の灯秋月

なりふりはかまっておれんへ子連れ 無聖

第二百七回（復活第十二回）

大 萬 川 柳

「橋」 入選発表

選者 清水 白 柳
 投句総数 六百二十九句
 入選 五十六句

丸木橋ゆずり合うのもくになまり

高 石 好 郎
 宝 塚 ゆきを

大臣が出て田舎には過ぎた橋

富田林 きはち

橋渡しして心中は妬いており

警察の所管が違ふ橋の事故

見送って帰りの橋が長すぎる

虹の橋姫のお供がとぎれない

橋へ来て家出も一度振り返り

橋までと云うた別れがまたくるい

糸柳橋のたもとの恋へ貸し

奥の院善男善女ですれた橋

改選の前に陸橋完成し

手を曳かせ愛たしかめる丸木橋

陸橋へ感謝幼い詩をつづる

橋下に住んで番犬飼っている

吊橋で這うるところを撮られてた

ボートの恋見ている橋の上の恋

歩道橋出来て気がねのいる二階

大 阪 弘 生

橋詰で逢うて真ん中の立話

西 宮 多久志

橋下に住んでテレビもあるくらし

堺 青 香

その次も橋の名で呼ぶ停留所

大 阪 滋 雀

バス停に名残りどめただけの橋

兵 庫 秋 月

公害が橋のらんかんまで及び

鳥 取 日 満

こそ泥の気持橋からゴミ棄てる

大 阪 水 客

天と地のあいだに吊橋ゆれてみせ

岡 山 久米雄

決断がつかずに橋をまた戻り

米 子 千 代

伝説の橋妻と交互に撮るカメラ

倉 敷 恵二朗

盲導犬橋の狭さへ考える

宝 塚 無 聖

モータープールに上つて橋の名を忘る

倉 敷 旭 峯

アリバイを橋に來てから考える

尼 崎 慶 彦

舞台いま先立つ不幸詫びる橋

大 阪 庸 佑

鳥 取 佳 女

明日までのサヨナラ橋でもう一度

大 阪 柳 志

老いのデート歩道橋を折り返えし

笠 岡 要 次

観光船マイクで橋を見上げさせ

昂奮のほてりが橋の上でさめ

引越しの蟻には余程長い橋

堺 草 春

竜宮の橋から蛸は引き返し

橋越えたところから夜店暗くなり

吊橋でふと手が触れた好き同士

大 阪 美 房

ぼったくる女が急ぐ戎橋

コーラスの聲が崩れた丸木橋

旅の夜の何かありそな橋へ出る

岸和田 きさ子

橋があるから人がある水都祭

ロケバスが来て仇討の橋となり

トコロテン橋と柳で売られている

夕焼けて橋は童話のシルエット

佳 句

送られる区切りに歩道橋が出来

橋一つ越えれば違う市民税

尼 崎 利 美

和歌山 虎 城

和歌山 吸 江

想いの橋とは知らぬ妻と付ち

高石 好郎

太鼓橋渡らせガイド息を入れ

大阪 柳志

市電廃止除に橋の名を残し

人ノ句

岸和田 かつらぎ

橋上の思案は戻ること決め

地ノ句

岡山 十九平

災害費で架ける気洪水待っている

天ノ句

大阪 小松園

大阪の住所は橋の名で覚え

選者吟

運転手橋で並んであきらめる

大萬ベストテン (九月現在)

(同点ノ場合ハ投句先着順)

- | | | | |
|---|-----|------|-----|
| 一 | 柳志 | 二二、〇 | 大阪 |
| 二 | 素身郎 | 二二、〇 | 倉敷 |
| 三 | 文秋 | 二二、〇 | 大阪 |
| 四 | 好郎 | 一九、五 | 高石 |
| 五 | 吸江 | 一八、〇 | 藤井寺 |
| 六 | ゆきを | 一六、〇 | 宝塚 |
| 七 | 水客 | 一五、五 | 大阪 |
| 八 | 十九平 | 一五、〇 | 岡山 |

九 弓彦

一五、〇 大阪

一〇 静馬

一四、五 高槻

一一 美房

一四、五 大阪

一二 きさ子

一四、〇 岸和田

一三 慶彦

一三、五 尼崎

一四 千代

一三、五 米子

一五 日満

一三、〇 鳥取

一六 草春

一二、五 堺

一七 小路

一一、五 大阪

一八 要次

一一、五 笠岡

一九 久米雄

一一、〇 岡山

二〇 梁水

一一、〇 倉敷

二一 一舟

一一、〇 大阪

二二 阿茶

一〇、五 大阪

二三 鉄児

一〇、五 門真

二四 清人

一〇、五 大阪

二五 静波

一〇、五 大阪

以下略

第十四回

「不良」

五句以内

締切 十月二十日

第十五回 (本年度最終)

「塩」

五句以内

締切 十一月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五一六

郵便番号 五九二

川村 好郎

川柳塔社

常任理事会

九月五日午後六時から常任理事会が開かれた。きようは二賞の発表とあつて、春果、桀、多久志三選考委員以外は全員出席。

なにか緊迫感でいつものようにジョークもとばなかつた。まず同人吟がわずか四十句よりないことはさびしい。

選考態度に対し、各理事からも相当きびしい質問があつた。作家か句か、新人か古豪か。選考委員諸氏も苦しい。

立ち場だが、作家一年間の心血の句を世に問うものである。

けつきよく二賞がきまつたのは七日だった。相当に荒れたことをご報告する。

同人総会は

来年が役員改選になるので、本年は案内状をださずに、誌上でご案内することにした。ふるって出席のほどを。

大阪市民文化祭川柳大会も来月に迫つた。ことは川柳塔社が当番なので、皆さんのお力を借りねばならない。

福井野迷路氏から陣中見舞いとしてビールが届けられ、やや緊張感がほぐされたところで閉会。野迷路氏にお礼申し上げます。

出席 庸佑、薰風、白柳、静馬、古方、好郎、没食子、形水、生々庵、水客、小松園、一三夫諸氏。



お買物は近鉄へ！

楽しい

アベノ・上六 近鉄

☆ 柳 界 展 望 ☆



左から弥生・好郎・葉子・薫風・奈々の諸氏。(鷺羽山で)

(橘高薰風担当)

時から呉市泉場町三、中津
泰人居で開催、多数の柳友
から祝福を受けられた。な
お麿光氏の新住所は〒73
1144。呉市焼山町二五
七一。

河相すゝむ氏急逝
川柳塔社
常任理事
九月十九日夜・謹悼

▼岡鉄川柳会備前川柳社会
同主催の蒜山吟行は八月十
七日から一泊で蒜山山陽休
暇村へ。

▼柳宴・そだ火合同句会は
八月十七日から一泊吟行を
横山ダムで。

▼いずも川柳会むらくも川柳会主催の玉造温泉句会は八月十八日（日）午後一時

柳大会並第三回川柳文化賞
贈呈式は十一月三日（文化
の日）午前十一時から東京

▼「せんば」 八月号は創立二十周年岡橋宣介古稀祝賀記念号として発行、「柳都」八月号も二十周年川柳大

から大和紡玉造寮で開催。
▼句集「吉備団子」(第十
九集)の原稿が募集されて
いる。応募用箋に自選句五

都中央区新富町二の二三印
刷会館で開催。兼題、作家
・陽当り・音痴・勢揃い・
結構・網棚・パイブル・門

▼麻生霞乃先生は朝夕の涼気に元氣回復、薫風がお訪ねした九月四日、「川柳塔の皆さんによろしく。」とのご伝言であった。

車、螢池下車、西百米、豐中市中央公民館で開催、兼題、オブリジェ、秒針、天気予報、ギャンブル、火、抵抗、市民、仙人、読書、名、各

会の模様が掲載され、期せずして若さに溢れる両社の大会の様子が出揃った。

▼第六回全国鉄川柳年度賞は酒井路也氏が一位を獲得

句と住所、氏名、年齢、職業、電話番号など記入の上、参加費三百五十円を封入、十月末日までに岡山市津島岡大官舎H三十七川柳岡山

柱・席題四題、特別課題一題、締切一時半、会費三百円、投句は百五十円（切手可）封上して十月二十日まで東京都練馬区練馬四の二

▼中島生々庵主幹は、九月

題三句、席題なし、秀句に

「仏具買う所詮繼かねばな」

名が寄書に見える。瀬戸内海を眼下に、はるかに石槌を仰ぐ東予休暇村で涼風に夜もすがら柳談雑談で賑わいましたとは宵明氏からの便り。

▼川柳道場が五十号を迎えたので主宰の水粉千翁氏は新しい企画で大賞作品選出を企図しておられる。

▼国鉄川柳句集一九六八年度版は七月二十五日全国鉄川柳人連盟から発行された国鉄マン百三十余名の句五句ずつの集大成で百十四頁二百五十四送料五十円。

▼中京川柳社二十六年史「照る日曇る日」は七月二十一日名古屋市緑区鳴海町文木二七の二名古屋川柳社から発行された。協賛の諸家近詠を集めた鱗片集が並載されている。定価四百円。

▼名古屋市川柳大会は十月二十日(日)午後十二時半から北難波小学校隣り尼崎市民民館で開催、兼題、風紋・奢る・鉦・塔、講演は松末三男氏、本社から清水白柳氏が選者として出席される。

▼尼緑之助氏(出雲市同人)から、「いずも川柳会に今回村松醉歩、岡崎祥月両氏らを迎え川柳活動にガッリンを注した思いで張切っております。」



▼山田季賛氏(高槻市同人)は八月二十五日新大阪を出発、長野善光寺へ参拝、一年がかりで休日を利用し十九日間かけて西国三十三ヶ所巡りを完了された。「長野路の汽車の混んでる登山客」

▼本多柳志氏(大阪市同人)は八月三十一日大阪の残暑をさけて湯原から蒜山高原へ遊ばれ、早朝の露天風呂に大阪の汗を流し、一泊鳥取砂丘を見て帰阪された。「大阪とは別なきれいな空へ立ち」

▼水谷竹荘氏(大阪市同人)は七月二十九日から四国一周の旅に出て、川柳高知の同人、檜谷桂緑、川竹松

風、永野舞子、田内文子、植本はる江氏らと高知市の白雲荘で川柳を語る会を持たれた。また八月二十三日全電信電話公社の川柳連盟全国大会へ出席のため、夏生、甘草氏らと同行、日光レクレションハウスで交歓された。

▼清水一保氏(鳥取県同人)は来る十一月の町の文化祭行事と、山陰川柳大会の諸準備に奔走しておられる▼田村藤波氏(岡山県同人)の夫人が八月八日朝死去された。八十三才。謹んで哀悼申し上げます。不足ない齢に未練がまだのこり藤波

▼浜畑胡蝶氏(大阪市同人)夫人クニさんは八月十日午後五時二十分急性心臓症で死去された。八月十二日自宅で告別式が営まれた。謹悼。

▼川鉄川柳会二十周年、明和川柳研究会・甲南川柳会・室十周年、並室田千尋・光森良合同句集「青い果実」発刊記念川柳大会は九月十五日(日)正午から須磨の

川鉄保養所薫風荘で開催。▼西宮市民文化祭参加第三回川柳書道合同作品展は十一月三日、四日の両日午前九時から午後五時まで鳴尾公民館図書室で開催される会費無料、メ切は十月末日連絡は西宮市鳴尾町の一四の一七樋口舟遊へ。

▼川岡霊眼子氏(諫早同人)は保育園の維持会長や西日本企画の重役などや本職の千里眼の仕事で寸暇なく作句する時間がないとのこと、かてて令嬢のご婚儀もせまり、まったくのうれし悲鳴をあげられている窓越しの風冷え初めて今朝の秋・霊眼子。

▼石川兼郎氏(明石市)塔の重なること三つ。改題されてから早や三年、お祝い申しあげます。

▼檜部いさ夢氏(宇部市)は緑内障にかかれ心身の安静のため当分川柳から離れることになった。しかし川柳塔だけは愛読すること。ご全快を祈ります。

▼川柳えんぴつ社(富山県

は)は番傘の傘下を離れて新発足をした。新会長は木村喜見城氏。

アイデアと技術で躍進する



早川電機

本社 九月句会

会場 天 性 寺
六日 午後六時

上本町の天性寺第二回目の九月句会。前月はやや不振だったが、今月はまあまあというところ。相変らず与呂志氏が一時間以上も早く出席して、準備をして待っていてくれる。こういう裏方の苦勞を忘れてはならない。

川村好郎氏の柳話は定評があり、氏の柳話ファンが相当にいることは事実である。しかも今月は、氏に指導をうけている人が多かった。

柳話は、初心忘るるべからずをテーマにしたもので、玉島での自動車の故障から柳話のクルマが回転する。薫風氏がどこへ行っても書物をはなさず勉強していることや、戦時中に軍需工場から故梅里氏と祖父をコロシテ句会へ出席したことなど、川柳忌にふさわしく川柳の芽を大切にする熱情がほとばしる。

新しい方がまた顔を見せてくださる。女流作家が十二名というはなやかさへ、花梢、千梢、奈良子さんが天位にかがやいた。月間賞は不二田一三夫氏。

(河井庸佑整理)

出席—与呂志・古方・双楽・生々庵・好郎・多久志・一乃字・一三夫・梶吉郎・村雲・文秋・楽々・花梢・万の・百酒・笑風・喜醉・貞山・白柳・眉水・静歩・一舟・金三・綾女・喜風・滋雀・いさむ・肖二・トメ子・つき子・日出雄・吸江・誓二・雄峯・庸佑・水客・奈良子・柳宏子・恒明・没食子・清人・葛城・鬼遊・薫風・凡九郎・静馬・千梢・富久一・季賛・笑巳代・小松園・紫香・頂留子・舟遊・あいき・君子・智子・笑痴・弓彦・葉子。

席題「マイク」

本多清人選

驕り日マイクのボリュームと触れず 笑巳代
マイクいま嬉しい鼓動伝えてき 水客
不愛想なマイクに乗客詰めこまれ 滋雀
マイク今日綺麗な嘘をつきに 来た 凡九郎
焼香の順声はり上げて呼ぶマイク 花梢
街録のマイク教養少し見せ 文秋
非情でもマイクは号泣ためらわず 富久一
ラッシュアワーマイク頼る人さばき 季賛
世論聞くマイクに十人十色知り 楽々
マイク合戦どちらにも理くつ持って 静歩
女にも堂々意見あるマイク 富久一
呼びかける吾が子へマイク泣いて 笑痴
はるばるとマイク美談を探しあて 奈良子
ベッドまでマイクが追った遭難記 一三夫
マイクへの距離にもアナが気を使い 没食子

席題「郵便番号」

西田柳宏子選

拝観料払えば坊さんマイク持ち 千梢
討論が白熱マイク奪いあい 一三夫
ヒーローもマイクの前ではどろちがち いさむ
客寄せかマイク朝から我鳴り立て 君子
マイクのお説教 随喜の涙出ず 多久志
笑わせるマイクはツボを心得る 白柳
賜杯手にマイクの方へ向き直り 庸佑
罪の子へマイクの母は泣いて 説き あいき
カットされども知らずマイクへ 喋り 好郎
手をあげてマイクへ一言ブツつもあり 村雲
五寸ほど離れちびつ子のマイク馴れ 笑風
コンコンとこづかれマイク試される 滋雀
蛙の子さすがマイクを気にして 一舟
ハブニング若さをマイクへぶつ 一三夫
突きつけたマイクに現場の慄え声 眉水
十代の発言マイクへ悪びれず 清人

郵便番号厄介ものとして生まれ 花梢
赤杵へ郵便番号行儀よし 鬼遊
郵便番号も入れて野心のある名刺 万の
郵便番号地方になって暇がいり 紫香
こんな市があったか郵便番号帳 好郎
死亡通知郵便番号抜けたまま 好郎
郵便番号面白がついてくれ 古方
協力と呼びかけ番号簿は買わせ 文秋
語呂のよい郵便番号で気をよくし 葛城
郵便番号キッチリ書いて一人者 静歩

郵便番号一〇〇 拝啓天皇陛下様 水客
 日本地図埋めた数字の便りくる 笑痴
 書留の郵便番号ペン太し 楽々
 郵便番号舌打ちをして調べ出し 村雲
 番号のワクまで書いて古ハガキ 笑風
 郵便番号5けたの町に母達者 水客
 手紙出す度にばやいて番号いれ 百酒
 株屋から郵便番号ある通知 万的
 女事務郵便番号の用が増え 好郎
 郵便番号速達だけはしかと書き 金三
 番号が達うてまっせと郵便屋 清人
 赤ペンで郵便番号枠も書き 与呂志
 新住所郵便番号そえて着き 与呂志
 郵便番号孫にバイトで書かず 一舟
 郵便番号機械も読めぬ数字書き 庸佑
 恋文もゼッケンつけて配られる 生々庵
 辞書を繰る手つきで探す番号簿 奈良子
 郵便番号老母いよいよ筆重し 一三夫
 お役所の知恵70円の番号簿 柳宏子

席題「底抜け」

山添眉水選

底抜けに明るい家に嫁がさせ 一舟
 底抜けに遊んでむなしさだけ残り 智子
 底抜けに飲むぞと幹事びくつかせ 誓二
 底抜けにされても僕には僕の道 季賛
 底抜けに見えても芯持つ無二の友 日出雄
 底抜けに明るい瞳鶴を折る 奈良子
 底抜けへ抵抗となる齢不惑 一三夫
 底抜けにはしやぎ自嘲のうす笑い 生々庵
 底抜けの香兵衛底が出来て老い 一舟
 底抜けの善人だった疎開先 肖二
 底抜けの明るさ消えた神経痛 笑風
 底抜けの笑い寝た子まで起し 恒明
 底抜けに遊んで無口の二三日 小松園
 手弁当で世話そこぬけのうちの 村雲
 そこぬけの善人こそばうなってる 古方
 地藏さんにも似て底抜けのお人好し 柳宏子
 底抜けの明るさがうずめたなさぬ仲 頂留子
 底抜けに看護婦さんの公休日 万酌
 底抜けの酒に自分を見失はない 花梢
 底抜けにされても本心確かない 季賛
 底抜けの馬鹿と言われてまだ笑い 綾女
 投げ出してから底抜けのお人好し 水客
 底抜けの明るさ理性うたがわれ あいき
 底抜けに酔うても敗者のうつろなる 好郎
 底抜けのお人好しにもある怒り 奈良子
 底抜けの明るさ敵をつくらない 恒明
 底抜けの笑顔胸上げされている 花梢

天の底抜け たか豪雨は二〇〇ミリ 眉水
 兼題「気まぐれ」 傍島静馬選
 気まぐれが冷水摩擦始め出し 形水
 気まぐれの娘へはらはらと父と母 どんたく
 気まぐれであてた馬券にとり憑かれ 野迷路
 気まぐれのつもら先さま本気なり まさひろ
 気まぐれな奥さん今日はそっけない 芳子
 気まぐれを本気にされてもて余し 正朗
 気まぐれに書いた短冊褒められる 綾女
 末子の気まぐれ親に似てしまひ 喜酔
 気まぐれに引くものでなし凶のくじ 村雲
 気まぐれなうさぎやる気のねじを巻く 頂留子
 気まぐれと今更云えぬ子を宿し 好郎
 気まぐれが早起きをして神詣で 双楽
 気まぐれにミニ踊りの輪へ入り 君子
 気まぐれな人だが粗末に出来ぬ客 百酒
 気まぐれが過ぎて医者から叱られる 一乃字
 気まぐれとなじる割には氣にせず 吸江
 気まぐれに撮った写真で賞を受け 肖二
 気まぐれへうちは命がけになり 好郎
 気まぐれのうちは競輪よう当り 好郎
 気まぐれに惚れますかいいなと涙ぐみ 生々庵
 大臣の気まぐれ口説けばあんたそれ本気 眉水
 気まぐれに口説けばあんたそれ本気 多志
 気まぐれな真面目な顔にだまされる 奈良子
 気まぐれな娘にあわてだす縁談 花梢
 本人は気まぐれと思うてず 千梢

気まぐれに大道易者へ右手出し
気まぐれに出したクイズがやめられず
気まぐれな男に添うて逆わず
ぐるりからつつかれ気まぐれも言えず
気まぐれに買ったくじから運がつき
気まぐれな動作が噂のタネになり
気まぐれの筈がうつつ抜かして来
気まぐれの散歩で小犬拾うて来
気まぐれにきた仲居の名は憶え
気まぐれに出した手紙に返事来る
気まぐれな社長手品を習い出し
気まぐれに付けた値段で買わされる
板打てば気まぐれ台風風を向け

兼題「ゲーム」

菊田いさむ選

社長曰くただのゲームでないゴルフ
売り子まで立ち止まらせる好ゲーム
ときどきはゲームもやらせ夏季講座
十円のゲームがパパを夢中にし
合宿の夜はゲームに打ち興じ
末っ子へ家庭ゲームの花持たせ
ついて居るゲームへ心のおごり知る
ゲーム差が縮まり聴視率あがり
思い切りの好きでゲームを吉と出し
提訴すると決めてゲームを再開し
負けているゲームへ冗談腹が立ち
ふり出しにもどるゲームのあつき
賭けてからゲーム一段活気づき

賭けゲーム凝って質屋に顔なじみ
コンマ五のゲーム差あも二位チーム
親善のゲームでけんかして別れ
楽しみのはずのゲームに泣く家族
ゲーム差が離れたすぎてて人まばら
差をりて勝ったゲームに凝りはじめ
小遣いがゲーム遊びに底をつく
ナイトゲームになる麻雀は服をぬぎ
ゲームの執心上役を意識せず
はさみ将棋駒を並べてママを待ち
ゲームそつちのけ審判をつるしあげ
熱戦へ堪能コーラのうまいこと
涼み台ゲームに出前忘れかけ
商談がゴルフになった応接間
酒の上のゲームと失言いさくれず
花もたすゲームにあくび噛みころし
温泉芸者すぐ腰紐をとくゲーム
フロックが出て鼻唄になるゲーム
カモになるのに目も鼻もないゲーム
裏のうらよんでゲームのあほらしさ
チョボチョボでよしゲームの和やさ

兼題「夕暮れ」

黒川紫香選

夕映えに見る初恋のページ
暮れるのを待ってたように誘いに来
夕焼けを背負った山の美しさ
約束の日だった夕暮れで思い出し
夕暮れはともかく帰り支度で忙しい

双葉 誓二 庸佑 頂留子 紫香 綾女 眉水 万志 智久 恒明 柳宏子 君子 好郎 水客 吸江 万的 形的 花梢 千梢 いさむ

焦らだちへ夕暮れの子がまた戻り
夕陽背にバス停の列又のびる
夕暮れへきよう一日の靴をぬぎ
夕暮れをねぐらの近い鳩が舞い
夕焼けに明日を働く身の構え
キャッチフレーズは夕暮れのを
夕暮れへほんとうの自分とりもどし
夕暮れの風吹き抜けて萩こぼれ
夢を追う心は老いず夕焼ける
サンマ焼く煙に路次の暮れかかり
川風の夕暮れ恋の歩く道
夕暮れの病院垣根で虫の声
夕暮れにケロッと直る二日酔い
夕暮れに一人淋しい使い込み
夕暮れへ思案涯なく夕暮れる
失職へ思案涯なく夕暮れる
夕暮れの湖水にばかり白い月
深山の夕暮れ凄じい蟬しぐれ
夕暮れに働き蜂の列帰る
夕暮れかかるビルで残業まだ続き
暮れかかる公園鍵っ子だけ残る
夕暮れの公園鍵っ子だけ残る
お喋り買物かごに夕暮れる
雑魚釣って帰る瞳のあかね雲
蝙蝠が飛ぶ夕暮れの露地の奥
せむし夕暮れパートタイムママ帰
ぶらんこがシルエットになり夕暮
夕暮れを野ら着の夫婦の影ながし
夕暮れの一軒宿で断わられ
夕暮れにホッと吾が身になる浴衣

白柳 頂留子 笑風 文秋 生々庵 古方 千梢 誓二 好郎 一乃字 万的 貞山 吸江 いさむ 一乃字 貞山 喜醉 小松園 誓二 肖二 智子 静歩 双葉

家出する決心つかず夕暮れる
 夕暮れの魚屋声を張り上げる
 犬連れて夕焼雲を見て歩き
 夕暮れの都会にうごく人となり
 夕暮れの小雨夜の荷が迷い
 夕暮れへ鍵つ子馴れた炊飯器
 夕暮れを待ちかねている芒の穂
 夕暮れに靴屋と屋台が入れ替り
 夕暮れに来い借金めどがつき
 夕暮れに影絵のような立話
 背伸びして夕暮れ惜しむ気にもなり
 夕暮れて雀も帰って来て騒ぐ
 夕暮れにだんだん降りる人が増え
 紫香

兼題「走る」

市場没食子選

耳打ちをして小走りに去る女
 結論を横から父が先走り
 どん底を走る馬券を握りしめ
 走っても走っても追いかけて来る恐い夢
 救急車走る音にも馴れて生き
 マラソンのビリ気の毒にもまだ走り
 日出雄

よろこびをかくせぬ顔が走って来
 信号無視走って渡って乗り遅れ
 若い眉あげてたくまし雲走る
 救急車走る道路の車よけ
 突っ走る選手をメキシコ待っている
 線外を走って園児賞に入り
 追いつけ追い越せ人生は走路なる
 金策に走る外車と思うまい
 死亡ゼロ走る兇器の名を返上
 夫婦だけへ回り灯籠の絵が走る
 パトカーが雑踏切った血液のリレー
 サインでは走れ盗塁はさまれる
 人生のマラソンビリでもゴールイン
 突っ走る若さは青春賭けている
 年かなし走れば乗れるバスながら
 小走りに彼の歩調について行き
 コンパスの差倅親爺を走らせる
 夕日がついて走る湖畔の汽車の窓
 打ち克ってポリスの足で走る
 車代にならぬ利益へ走らされ
 走る子が見えぬど向ける車椅子
 富久一

突っ走る若さ見まもる眼がぬくい
 わけもなく前が走ればつい走り
 走らだけ走り満足天を吸い
 子の歩母小走りに歩をあわせ
 走る孫守に疲れて年を知り
 走ってまで追い付いたのに人違い
 急病に走る夜中を医者の家
 走っても迷路のつづく夢疲れ
 走らだけ走って駄馬となっていた
 韋駄天とよばれる選手もつ強み
 松茸の走り庶民にほど遠し
 銀行へ今日の約手に走らされ
 逃避行馬糧は走る国境い
 大穴にこだわりもなく馬走り
 超過量オーバのダンブ突っ走り
 好かんタコ虫が走るのをくらえ
 スピードは落ちても市電まだ走り
 マラソンのトップが見えて湧く歓呼
 台風兆しを見せて雲走る
 メキシコで走る選手もさあ決り
 没食子

10月の句会

玉造川柳会

時 十一日(金) 午後六時
 題 結婚・放送・代表
 所 大阪信用金庫玉造支店

堺・若芽合同句会

時 十月十三日(日) 六時
 題 回り道・へそくり・味
 所 堺市九間町山ノ口筋
 八木摩太郎宅

南海川柳会

時 十月十七日(木) 六時
 題 重役・いざこざ・間違
 所 ナンバ高架下
 親和クラブ

南大阪川柳会

時 二十日(日) 午後六時
 題 興奮・ひみつ・お手上
 所 北生野町一丁目乗願寺
 トロボス線国分町東三
 ○〇米

川柳用語いろは集

鈴木村諷子

い 生き仏 犬つくばい 色眼鏡 犬をする
ろ ロボット 浪人
は 箱入り女房 はしご酒 花の山 初鯉
売笑婦 花言葉 花婿 拝金宗 花を持
たせる 馬鹿正直 初午
に 女房孝行 似た者夫婦 煮えたら食わあ
ほ 豊作貧乏 惚れ薬 星うらない
へ へそくり ペテン師 減らず口 平家蟹
と 土左エ門 ところ天 年男 とちめん棒
通り一片 年の市 とんちんかん 虎の
巻 どたん場 とんぼ返り
ち 智恵の輪 乳貰い
り 緑蔭 倫落の女 両天秤
ぬ 糠に釘 盗人の窓
る 流転
お 鬼っ子 おかめ 大ぐちなわ(大酒家)
わ 追銭 花魁 鬼火 女形 大風呂敷
か 笑いが止らぬ
金が降る(慈雨) 角兵衛獅子 鍵っ子
鎌で熟らせる かかあ天下 感情の動物

よ 横紙破り よわり眼にたたり眼
た たいこ持 たよりにしてまっせ 田んぼ
の子 竹の子暮し
れ 冷血漢
そ そらとぼける 総花的 総会屋
つ つむじ曲り 月とスッポン 月見草
ね 猫なで声 年期
な 夏餅は犬も食わぬ 永い眼で見る
ら 楽隠居
む 無言劇 村しぐれ
う うしろ指 内弁慶 運座 うどんげ 内
る 股膏薬 売言葉 雲水 海千山千
の 居留守 居候
の れんとすね押し 蚤取眼
く 雲の峯 くらげ人生 くされ縁 草野球
や 藪入り 遣り手 八つ橋 野次馬
ま 迷い箸 マスコット 毎度有り まき餌
け けさまで憎い 下馬評
ふ ふんどし担ぎ 風船 プロポーズ
こ 声色 心の扉 五右エ門 木っ葉役人
え 縁の下の方持 海老で鯛を釣る
て 丁寧だらう
あ 甘党 頭に来ちゃう 青空教室 あきめ
くら 朝帰り 青写真 頭の体操
さ 里の母 座敷牢

き 清水の舞台から飛ぶ 黄な声 近所突き
合い(交際) 金銭の奴隷 金魚花
ゆ 夢枕に立つ ゆでだこ 夢を育てる
め めんどりときを告げる 冥土の土産 目
腐金
み 三日天下 身売り 三下り半
し 尻に敷く 如露 小便無用 思春期 し
やくし定規 蒸発 新造 情熱の丘
え 遠慮の固り 依怙ひいき 燕雀
ひ 左効き(上戸) 人を飲む
も 紋切型
せ 川柳年令 生理休暇 背広族 千秋らく
政治の貧困 銭別の催促
す すし詰め 捨子
▼感覚的には死語になっているのも相当あ
ったが、常とう語を調べるとおもしろい。
★ 秋近しく楽しくむくれベン運ぶ 本田恵二朗
九月号の四十七頁に「三対二の旅」という
文字が目についてサア恵二朗がむくれ出した
ものである。恵二朗城のお庭である鷺羽山を
城主に無断で歩き回るとは不届千万なるオス
メスである。赤電話でちよいとお届けあれば
お庭進入は勿論許可されるであらうし、寄せ
書の五句は六句となるに決っている。以後無
断進入は厳禁することをごここに声明しておく



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。結切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

全山陰川柳大会

主催日ノ丸川柳会

どうせ親子やと酒ぐせまで結び日満
姿見にまずまずと云う笑顔緑之助
働いた汗へビールが待っている八歩
あと二日ですよと少しあわて出し
当選を待つ祝盃の待ちきれず明朗
貫録があるのに寄附は出ししぶり
雑音のがれる靴のひも結ぶ雄々
大胆なポーズ女だけの城星影
働きの尊し汗は玉と散り一甫
三日前残りの夜を母と寝る日枝子
あみを張る蜘蛛は気長に待つまい
死して尚貫録があり墓の石泉甫
定年へあとが三日の靴を履く千代
ふるさと汗の匂いの夏祭り君枝
見比べて待ったそがいのタミナル
汗と児を結ぶ乳房の桜色源太夫
汗拭いてふいて水屋よく稼ぎ三鮎
落ちふれて見れば貫録邪魔になり
おび止めをくわえて姿見気に入らず
河南

アユ針を結ぶ根気は社で済せ
夏姿まんざらでなく連れ歩く
化粧する後姿に適合期清流
ピンカール姿じや堅い国のイ
三日前記憶の隅を尋ねられ
汗のシャツ体臭までも親に似
稲伸びる土の匂いに汗忘れ
貫録も帰れば唯の亭主なり
貫録も妻の横槍受け切れず
ふるさとの香り送って待つ便り
歯痛止もらって次の番を待つ
貫録はないが勘定みな払い
庭の松さんざん苦勞した姿
恐るに足らず姿勢をとこえる
三度目はざっくばらんに結ば
洗髪もすませて予定日三日前
三日前越して来た子幼稚園
お白粉の乗らぬ見合いの三日
三日前見舞った母が氣にの
お疲れさんと汗を拭く扇風機
作文は冷汗が出た参観日
さば折りに見ている方が汗を
急ブレーキ踏んで冷たい汗を
五月雨に蛇の目京下駄夏姿
姿見にうつるうれしい日の笑
振り返り振り返り後姿の似て
貫録をダブルにつつま羽田着
貫録におされ意見を云いそび
貫録がついて動作がニブくなり
干割れた田圃へ農夫雨を待ち
空梅雨へ悲鳴盆栽雨を待ち
鶴丸

レコードで結びの神に納められ睦緒
大鉄川柳句会 辻白漢子報
診断書添えてワンマンだまらせる
丁寧添書の名刺に判を押す耕三
人生論鉄だこを撫でながら杜魚
一枝を落す思案の花鉄初甫
胃の腑まで響く残業の貨車を押す宗悟
お互いに残業の一生とも思う水客
内職の鉄は子等に使わせず求女
鉄もつコツも教えて幼稚園三求女
残業も働いた気の腹が減り飛鳥
内職の能率鉄のせいにする風杯
生活の余裕へ添える花を活け季賛
最終の列車残業の人も乗せ実男
備前川柳社 目賀芳月報
新顔の話は鼻であしらわれたくお
鼻声で男の理性くすぐる気正洲
葬式で涙が出ぬから鼻をかむ秋月
鼻風邪をひけばひいたである魅力芳月
鼻声で無心ありげな女将が来博友
鼻すじをカメラのせいにして話し幸仙
焼酎を貰うおっさんの赤い鼻一声
鼻の差で負けた馬券をもみ捨てる
鼻声へ旦那の決意くずれかけ伊久野
自惚れの自信鼻をふくらまし胡風
鼻声が出る財布の金が出る雁来紅
父ちゃんの鼻によう似た子に生れ水仙
鼻の先かじられている文化財柳子
子の里へ鉄路の続くなつかしさ万女

じいちゃんのおぐせ孫は笑わない 久米雄
高知川柳社（高知市） 川竹松風報

長男は育児書通りに育てられ 勝子
ババ抜きもならず長男まだ独り 武司
母一人子一人父の意志をつぎ 伸
長男に生れ因果なクワをふり 蟠蛇
長男の嫁に備えた隠居銭 伊津志
長男は大学赤旗振っており 寛
長男に城開け渡す日が迫り 初美
長男が土に未来の夢をかけ 柳水
エプロンの下で胎動の嬉しい日 窓花
エプロンを外すが程の客でなし 運幸
良妻になるエプロンの白を買い 文子
純愛をわらう女のアインシャドウ 一人
老いらくの恋のデイトは古い寺 竹莊
会っている時に別れは思うまい 美知
コマシヤルでないノックとび上り 紅雨
ネクタイを真直にして送り出し 松風
自慢にはできぬ女の酒の量 舞雨
筆不精旅の一夜に書く葉書 白雨
散髪の予定早る趣味の会 たかし

南海電鉄川柳会（大阪市） 辻圭水報

保養所へ来てノイローゼ重くなり 東雲楼
保養所のこまで来てる排気ガス 圭水
保養所の床の下から釣道具 金三
徹夜する妻保養所の隅を借り 摩太郎
盆帰る保養所近所の人もいれ 遊仙
保養所で社運ひそかにたしかめる 宏山
落したら駄目と往復買わさない 貴山

往復券さて復片のみつからず 圭水
往復をあるいて心ブラ苦にならず 宏子
パートタイムマママイカーで往々帰る 東雲楼
附箋つけて迷子の手紙戻って来 金三
往復ハガキそれ程でない料理出る 好郎
とんぼ返りと云う約束で故郷へ発ち 摩太郎

和歌山短詩型文学クラブ

三幸報

零並ぶ経済白書ピンと来ず 善八
人生のゼロの基点に立ちつくす 太茂津
ゼロを追ひゼロに追われる小企業 公作
退屈な視線集まる医者のだア 智水庵
集めてるうちにブームのむきをかえ 葵水
舌打ちで見送る球はホーミラメ 利晴
舌打つて来た乙女の折りゴミ集め 佐知子
舌打つたとたんに運がむいて来た 次章
舌打ちをしても付馬ついてくる 政夫
何かあるように集まるメダカの子 一光
零一つ増えた今年の決算期 三幸
舌打は人に聞かせぬ身の苦勞 蘇風
舌打ちに猫もひざからそっと立ち 義太郎
電話口舌打出来ず舌を出し 富士
いらだちも舌打重ねるうちに消え みさ
へば将棋待った待ったと舌打し 靖子
初売りへ舌打ちさせた付けの客 城石
舌打で済ませてくれた親心 朱三子
舌打が習慣となり失意の日 光治
共稼ぎ硬貨集めて貯金をし 喜子
騒音ゼロ山の宿りは蚊と喧嘩 白柳
舌をみんな集め遺言などはなし 生々庵
舌打ちを止めた笑顔が貸してくれ

六カ月速成

教授日 毎水曜日、月四回
自午後七時 至午後九時
教授料 一ヵ月二〇〇円

関西奇術教室

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
誓得寺内
TEL 四七一二八
校長 村田 瓢太

オーエスケー川柳句会 大坂形水報

あらためて女が強いと山で知り 久二
童顔の振るバッターに飛球舞う 暢一
顔色に話の筋が遠ざかり 幸太郎
横車押していればずみしる顔 時繁
子を持って夫婦げんかの意地も消え 健坊
ここでハイ言えば済む意地を張り 博
頭はない意地で女を悲しませ 亜成
意地哀れ女房三日無口なり 功
山一つ消えて団地の白い壁 一扇
意地つ張りかひとり居たのでまじろ 仙夢
社長にも逆らう程の意地が欲し 神田
六甲の上で交通マヒに会く 形水
意地張っているともとれる口をきく 白柳

ウィロー社句会（ハワイ）

迷いとは知りつつ邪教にこる 弱さ 万里歩
人生を慾と榮利が迷わせる 柳 葉
迷いから目覚めて今日の青い空 泉 水
独り者宙に迷うた遺産金 拝 山
条件がよいので迷う未亡人 あき 坊
一度ぐらゐ迷つて見たい 春の山 浮 草
迷うだけ迷うてそれから灰になり 峯 山
迷わずに生きてよかつた子の寝顔 K 女
迷い児をたがひて呼び出す 電話口 紅 茶
落伍者のもがき迷路へはまり込み 曉 舟
親の名も知らぬ迷い子もて余し 内 海
人生の迷路幾度行き悩み エス 子
天皇の代りに教祖の額をかけ 快 夢 起
迷路から覚めて 人生古稀の坂 紅 溪
たそがれを迷うて見たい夢があり 蒼 蛇 樓
迷い子はただあつちから来たと言ひ カロ 女

南大阪川柳会

金井文秋報

生活のリズムが狂う夏休み 弓 彦
銅像は全盛時代の顔で佇ち 滋 雀
独りなつてやつとヒロインはつと 柳 宏 子
手応えに甘い考えすて切れず 恒 明
人並になるとご恩をもう忘れ 金 三
手離しに出来ぬ生徒もいる 夏 休 み
ハッピーエンドヒロイン元へ戻す 古 方
鉄面皮こたえたはずが顔に出ず 文 秋
手応えのない恋ゆゑに燃えに 燃 え
人並の暮しに女あき足らず 一 舟
地価騰り銅像惜しい場所建ち 泉 吉 郎
ヒロインの涙真珠となつて散り 小 松 園
娘の支度せめて人並願う母 喜 風

玉造川柳会（大阪市）

西出一栄報

人並に成仏出来ぬ程に貯め 生 長
人並の暮しも出来ぬに犬を飼ひ 君 子
俵に飽きてヒロインに憧れる 智 子
ヒロインに仕立て稼がす下心 双 葉
ヒロインの大阪弁がきこえない 静 馬
似たとこがあるのでヒロイン好き 吸 江
ヒロインにとやかくあつた裏話 庸 佑
ヒロインになった気家出かえつて来 葵 水
ご近所と同じレベルで親しまれ 千 代
七光人並以上を突つ走り 柳 梢
泣かせるためにヒロインの泣き黒子 白 柳
罪惡感よりヒロインにでもなつた 頂 留 子
人並のくらし月賦でやりくりし 章 雅
人並の顔へどぎついアイシヤドウ 野 迷 路
金槌を捨てて喰わえた指の色 一 栄
ひとつとこのように看護婦針をさし 貞 山
はやつてる かげにサービス行届き 柳 宏 子
ひとの酒すすめサービスしたつもり 一 舟
サービスがすぎてあんまり儲からず 肖 二
景色より美女のサービスお気に召し あ い き
真心と云うサービスを忘れかけ 古 方
予想屋に馴染が出来て又すられ 柳 志
ギャンブルへ男の意地と何を云う 鬼 遊
ギャンブルと私とどちらが好きです 誓 二
儲かるともあつてギャンブルやめられず 六 竜 子
ギャンブルに弱く宗教心強く 亜 成
ギャンブルも本で勉強して 出 け 綾 女
ギャンブルへ暮れる都会の灯はぼれ 照 一
鬼の留守決めこんだのに戻つて来 千 歩

出しぬけの話へ息をととのえる 雀 踊 子
万障を繰合せねばならぬ不意 恒 明
当分は休んで時期を待つと決め 竹 青
当分のままの対策まだたらず 凡 九 郎
ここ当分半どんやめる人不足 形 水
当分はその玩具だけ大事がり 弓 彦
寝巻まできけて郷里の母が来る は じ め
執念のコツコツ貯めるだけに 生 き
執念の悲哀を偲ぶ大阪城 双 葉
東大へママだけ執念持ちつつ 井 平
執念の深さデッカイルを建て 句 念 坊
頑張りや云われて時間惜しくなり 念 念 坊
白いもの白く執念妥協せず や な ぎ
立直る執念ドヤへ置き忘れ 滋 雀
執念があんなやさしい人を変え 伸 吾
執念を捨てて 尼僧になると決め 金 三
執念に燃えた女を逃げまわり 文 秋

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資
会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五一 四
夜間 06 四四〇 八

まるべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報

寄り添うても傘の高さに気を使い
この土塊見よとばかりの登山靴
噂の種蒔いときながら知らぬ顔
水虫には勝てずメッシュをはり込
ハイヒール一尺ほどにしたい背
ハイヒール夫と出るときあきらめる
好立幸瓢星泉
郎見子太斗陸

あすなる川柳会 (大阪市) 川村好郎報

流行も追わず半皮打ちつつけ
赤旗も労基法もなしノルマ
二人共曲げて趣味を合せての弓彦
温情のないノルマだけど挑戦すゆき
ボナナスをノルマではじき前借し
削るたび折れる鉛筆へし折られ
すずなりへ土産の鹿の足も折れ
好百青
郎酒香

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

過去現在未来に生きて比翼塚
こけしなどになるとお染の知らぬミ
ミニスカートの股の下なる摂河泉
日帰りの実家で遠慮のない昼寝
日帰りにするには惜しい湯の溢れ
日帰りはむしろの席で酒をくみ
観音さんがガムを噛み噛み登りつめ
近松に野崎観音ささえられ
河内野のここに恋あり比翼塚
アベックも染久松取なり
比翼塚恋愛至上主義眠り
梅雨晴れて観音像を拝む幸
弥生

和やかな集い仏に頭下げ
木魚をねむたく聞いて句会すみ
比翼塚若い世代は振り向かず
山の香に触れて幼き日を想う
木魚がすかに吟行のめしにする
マイカーで日帰り地図が大きなり
日帰りは月の夜道をまだ歩き
日帰りに老母もはじめて空を飛ぶ
日帰りの出来ない程に話もめ
日帰りの息子小遣い呉れて去に
日帰りの恋は熱海の砂に酔い
日帰りに傘とカバンを持ち廻り
日帰りに思えぬおしめのカバンさげ
仲裁が帰れば酒の肴にし
仲直りした日の酒は込みわたり
父の日はせめてゆっくり寝さしたげ
米朝の野崎聞きたいたんぼ道
お染入松ここで逢ったか松へ付ち
好奈吐
郎柳来

駒つなぎ句会 (大阪市) 岸南柳報

知らん顔してやる女房の貯金帳
子が出来るまでと焦る貯金帳
少しずつ貯めてじりじり減る預金
一泊の旅へばちばち女貯め
大それた旅を夢みている貯金
幸福は金ではないと貯めている
結婚は一年先の定期する
貯金ヘдайアあやしく誘いこみ
役に立つ貯金であった父の死後
そろそろと親に追いつく金の利子
喜風孝子
双葉雪
雄峯
県吉郎
いわる
馬翔
比呂路
万竿
文代
葉子
生長
草春
与太郎
奈々
白柳
好郎

終電で紳士の裏を見てしま
老紳士ラッシュー一台見送らぬ
安っぽい紳士の昼は中華そば
酔かめて紳士の飯面はとり戻し
静趣味へ紳士の顔面はがれかけ
通されたロビー紳士の顔で掛け
過信して紳士の翼に引っかけ
立ち飲屋紳士表へ尻を向け
モーニング脱げば入墨ある紳士
川柳たけはら (竹原市) 山内静水報

お姉ちゃんの足は太根にしか見え
侍って待って来なかつた傘
似ている人間のボス猿のボス
卒業をする気しないうの全学連
はっと目が覚めて只今授業中
浴衣着て歩く裾がじやまになり
就職内定何かが崩れそう
自分まで否定するのが革命さ
抱くようにお猿の電車へ母を乗せ
そつとしておこう思われニキビなら
珍客のいびき眠れぬ窓をあけ
百姓へ嫁ぎ田植だけはする
子の飽きた小鳥に朝を教えられ
そうめんをおかわりさせる柚の青
孫から小遣い母も歳重ね
明日試験一夜漬でも致します
野に咲いているから野菊美しい
いつからか家紋自分の色に染め
母と云う責めへ眠れぬ夜のしじま
小柳路
白眉水
宏みよ
多津緒
喜正
悟郎
南柳

犬老いて鎖りの長さもてあまし 春昇
 悲しみは義父焼く薪へ火をつける 笹舟
 割り込みをされて話に身が入らず 静波
 無効票日本は平和であるしるし 一路
 夕立が花へ無情を叩きつけ 英詩
 暑中見舞 催促がてらに出しておき 美佐雄
 自家用車夢見て通う教習所 青居
 刺のないシャボテンどこか白痴めき 泉
 よろめきのドラマへ妻の 昼の貌 清太郎
 楽しみは抜きつ抜かれつ 夫婦の句 康徳
 夕昏れの砂浜に漂う母の私語 扇水
 半分聞いても大物らしい嘘 不動
 ヘソ繰りが持てる身分と違います 政己
 野良犬の白い眼人を憎めるか 峰泉
 地くずれの宮まだ建たず 蟬が鳴き 鬼焼
 働ける 幸福瓜の土を掘る 清海
 雨しとど 野球やるとこやらぬとこ
 おれにまだ芸があるから？すづかず 草蘭
 バカだなあと云われてそうかと思っ 幸
 あじさいの色よ逢った日 訣れた日 不
 働けるこの平凡の伴よ 大
 蛇を見て首をかしげて いる小鳥 雅
 女が言った私は一人で生きてゆく 文
 茶を所望するひとときの尊とかり 晴
 児のセータ手編む女の目がききれい 静水
 デビュをしたらか噂それっきり 天石庵
 すだれ如露 ホースわが家の夏の陣 紫苑
 ふじかけ短詩陸会(鳥取市)藤本礎山報
 白壁へ傷穴のよう 蠅二つ 良枝
 洞穴でしぶきに遠く雨宿り 美弥
 蠅入れる迄を見て居た 蟻の穴 清子

就職の兄へ心の穴が出来 出来
 雨の日の雨傘の下 僕のもの トンネルの穴ひろがって 景色見え
 岩山に神事を誇る穴があり 友情が心の穴を指適する
 穴あけたどたんば友が埋めて呉れ 鉢と云う名の砂丘穴を見せ
 ビクニック雨で玉子は食べで置く 気をつけと云われた卵の箱おとす
 ゆで玉子煮の分まで一つ食い 誕生日煮抜き卵を山と盛り
 食え食えと云いつつたまご食っちま 玉子産むカナリヤ煮抜きの黄味を
 たまご産む迄は御飯を待っている お見舞いに行つて玉子をもらつて来
 可愛い児たまごなんかにたえな ぬで玉子稚ない頃の亡母思
 たまご 雛母によく似た目が笑う (以上小・中学生)
 マーケット一番後で買う玉子 喜美
 玉子がけ一番好きな児の笑顔 慎理子
 折角の見舞いのたまご 積んだまま ハムエッグなんだ玉子と豚かいな
 焼たまごお八つがわりに買わされる 敬老会食べ放題に盛るたまご
 さよならの心に穴のあいたまま 留守番の昼寝へ電話が穴をあけ
 人を待つ女かかとで穴を掘り 城山の洞穴哀話を今の世に
 パチンコへ千円ぐらいが穴をあけ 何時か勝つつもり馬券で穴をあけ
 十三子 保夫
 失敗が老いの自信へ穴をあけ 昭夫
 鉱脈に望みをかけて穴を掘り 長鶴子
 ポッカリとあいてた穴が富士五湖 心から語り互の穴をうめ 千鶴子
 お互いの穴を埋めあう義理の中 吉春
 洞門を抜ければ郷ももう間近か 新妻は障子の穴が気にかかり
 巧妙に秘めた帳簿の穴がばれ 手遅れでなくてよかった胸の穴
 言い勝った心ばかり穴があき 妻入院わが家にばかり穴があき
 大穴をねらうまなこがけものめき 笑い顔の智慧玉子買わせる気
 ゆで玉子孫と二人の星が済み 母と児の笑いがはずむゆでたまご
 ゆで玉子塩まで添えて母見舞う 佳女

高級洋菓子

プラス

堺市役所前 TEL(2)2334

よみうり川柳 (第3集)

池田 あや子 編

昭和四十三年七月発行 A 6版 非売品
大阪読売新聞岡山支局発行

昭和四十二年度のよみうり岡山柳壇にのせられたものを、選者の池田あや子さんが自らタイプされた一三二頁に及ぶ貴重な作品集である。毎週の秀吟には選者の評があり、初心者への適切な指針となっている。殊に月間評には選者の川柳に対する心がまがえが打出されているのが目をひく。例えばA夫人いわく「川柳とは冷たい刑事の目、鋭い外科医のメスのような仮借なき現代世相の批判だと思っていました、よみうり川柳を見ているうちに気持が変わってきました。川柳の基底は愛なのですね」と。川柳は生活のオアシスである。というように毎月のせられている。

たわむれににぎる夫の手がぬくい

井原須枝子

(白柳)

第2編集室

不二田 一三夫

十二月号に入れる原稿は、
十月末日までに本社着便。
毎号二カ月前に編集します。

ヘンなところがアイてしまった。何か小品がないものかと、原稿入れをさがしたが、帯とタスキでどうにもならない。
そこで、いまお預りしている原稿をご報告することにした。

富士野鞍馬氏、東野大八氏が各一編ずつ。
阿部佐保蘭氏の「ブライス先生の憶い出」戸田古方氏の二編。

高鷲垂鈍氏と吉田水車氏は五編以上。「雅号ぶっちゃけなし」は、こちらからお願ひしておきながらまだ数篇も残っている。

まだこのほかにスペースさえあればスグにでも発表したいのが相当ある。だが、個人攻撃に近いものや、ご自分の売りこみ用のものは保留させていただいている。(十月現在)

雑誌というものはページをひらいて右がフスマで左が障子では読みづらい。左右、何か



一貫したものを感じないと読書欲はわかぬものである。ここに原稿のなやみがある。

それにもう一つ、重要なことは、読みものには「玄関」用、「茶の間」用、「奥の間」用から「台所」用 ETC……があつて、いくら名文でも「玄関」にもっていけないのがある。かといつて、内容は「玄関」だが造作が「台所」というものもあるわけだ。

本号のように二賞発表に九ページ近くも使つてしまうと、ちょっと狂つてくるが、毎号こんな苦しみをしていることは、どなたも知つてくれないようである。

広告一つでも、たとえば酒の好きな執筆者には酒の広告を入れるようにしている。

「川雑」時代には、原稿用紙を使わない人がかなりいたが、このごろは全部、原稿用紙なので仕事が楽になった。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に
タケタ薬品



アリナミンA

・2 D K・

★二賞が発表された。十二冊の雑誌から、十句だけ選びだす選考委員の苦勞はたいへんだったこととおもう。しかし作家側もこの日のために、血のにじむような努力をかけたわけだったのである。

★選考方法は毎年変わっているようだが、とにかく栄光の句がきまった。

★理事会で決定されたことではあるが、句も作家も多い同人作品の選考委員が四

名で、一般の部は六名である。したがって百句のうち同人作品は四十句よりないわけである。だから同人作品のすくなかったことと厳選とは別の問題である。

★次号は例年のように「はたらくうた」を特集することし、顔ぶれは全部変っているから新鮮だ。ご期待ください。

☆台本の場合、感覚の古いものは全部ボツである。選者（プロデューサー）が三十台前後の人だからである。

（不二田一三夫）

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句） 中島 生々庵選
近作柳樽（10句） 西尾 栗選
課題吟（各題5句以内）

「美人」 北村 三歩選
「急ぎ足」 黄瀬 美秋選
「運」 小川 静観堂選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

新年号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句） 中島 生々庵選
近作柳樽（10句） 西尾 栗選
課題吟（各題5句以内）

「テール」 小 林 孝正選
「鳥」 川 端 東雲楼選
「柏手」 服 部 十九平選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

川 柳 塔 柳 箋

一冊 65円・送料 35円

定価 百四十円（送料六円）

半年分 八百七十円（送料共）

一年分 千六百八十円（送料自担）

昭和四十三年九月二十五日印刷

昭和四十三年十月一日発行

大阪市南区船場中津之町二番地

編集人 中 島 蓬 太 郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区船場中津之町二番地

発行所 川 柳 塔 社

電話大阪・二七二二九八五番
東京・三三三六八番

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！



大阪・東京
大丸
京都・神戸

43年度・川柳塔社同人総会

十月六日午後三時から天性寺句会場で。

近鉄特選のレジャーコースを
割引料金でセットした

近鉄サニット

サービスユニット



サニットは近鉄沿線よりぬきの
コースを魅力的にバックした便
利でおとくな観光クーポンです

▼大阪上本町・京都から
大台ケ原 1泊 サニット

大台・大杉 2泊 サニット
(利用は10月31日まで)

▼大阪上本町・京都から
奥志摩 1泊 サニット

▼大阪上本町・あべの橋・京都から
吉野山 1泊 サニット

飛鳥民宿 サニット
日本ライン下りと明治村サニット
(利用は11月30日まで)

▼名古屋から
吉野山 1泊 サニット

大台ケ原 1泊 サニット
大台・大杉 2泊 サニット
(利用は10月31日まで)

信貴山 1泊 サニット
飛鳥民宿 サニット

奥志摩 1泊 サニット
(利用は11月30日まで)

友ヶ島・新和歌浦 サニット
淡路島・鳴門観潮 サニット
(利用は11月24日まで)

●お申込みは：近畿日本ツーリスト
京阪神・名古屋地区営業所

気品あふれる シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。
その秘密は、東レテترونの
激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。



東レ テترون (ポリエステル 84%)
オルテロン
スーツ・スラックス
Toray 東洋レーヨン株式会社

